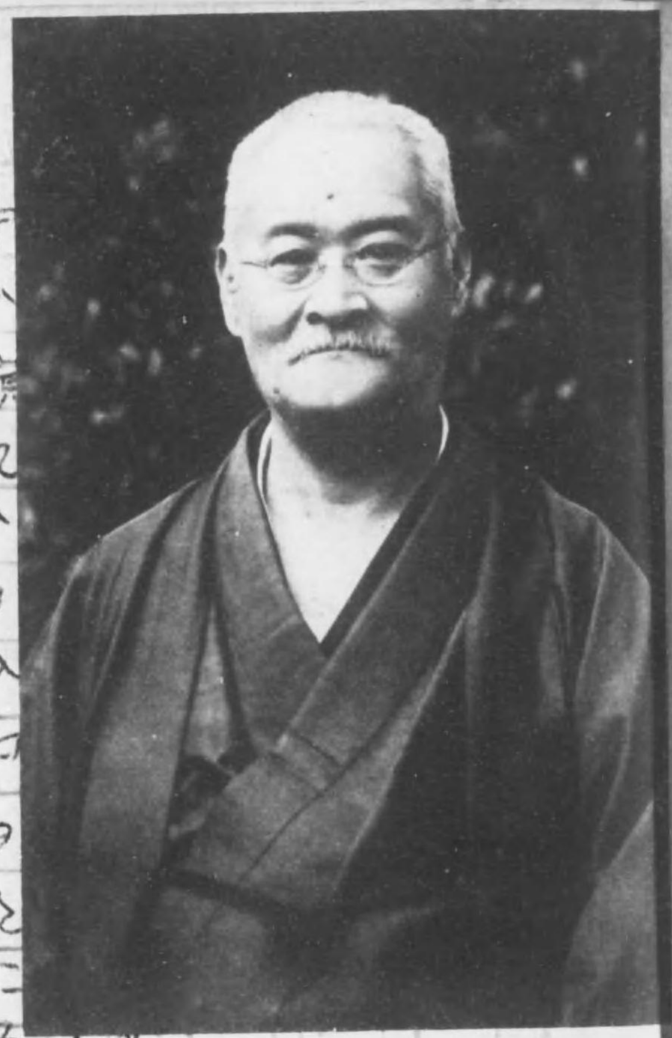
357-340
1200501411197
357
340

百夜

著袋花山田

版出社論公央中



昭和二年頃、五十七歳（昭和五年頃）

田山花袋

二

中が焼て、多入口のところに出て私とつい

見た髪を結った女

た。岸井はお爺を先きに千駄ヶ谷が元気よ

く歩いて行った。

二月廿日

つづく

八重吉はこれに

た。

つい

557-340

序のことば

『古き枕、ふるきふすまは、貴妃がかたみより傳へて、戀といひ哀傷とす。錦床のよるのしとねの上には、鴛鴦をぬひものにして、ふたつの翼に後の世をかこつ。』

これは古人が紙衾の記のはじめにしるしつけた言葉である。その屑に近く、そのにほひの殘りとゞまつてゐるやうな作品は、これを古き枕、古き衾にも譬へて、戀の形見とも見、また哀傷の名殘とも考へたい。

吾友、花袋子は五十七歳の春に、こんなやさしい作品を綴つた。明治も二

十四年の早い頃から、およそ三十八年の長い間に亘つた子が文學生涯の最後にのこした作品が、この『百夜』であるには驚かされる。花袋子とてもその晩年には年相應の戰ひをまぬかれなかつた。冬と夏、老年と青年とはつねに子の内に戰つてゐたやうである。しかし五十七歳の子に、この『百夜』のやうな作品のあつたことは、長い文學生涯の最後まで子の老いなかつた何よりの證據であらうと思ふ。昔、深草の少將は小野小町のもとへ九十九夜も通つて凍死したと言ひ傳へらるゝが、これは優に百夜を突過してゐる。題目すでにユウモアがある。前田晁君がこの作品を評して、『實に靜かに落ちついた男女の心理を捉へて、優に作者が到達した老境の心理を髣髴させてゐる。』と言はれたのはわたしも同感だ。

花袋子が數多き著作のうち、わたしの愛する作品は五つある。『生』、『一兵卒の銃殺』、『田舍敎師』、『時は過ぎ行く』、そしてこの『百夜』がそれである。子が亡くなつた後、わたしは子が藝術を子の生れた上州の自然に結びつけて見て、ひとり回想に耽ることがある。子の『生』及び『一兵卒の銃殺』は、たとへば榛名、赤城に見るやうな上州の山々の活動のすがたであらう。そこには滴るばかりの生氣があり、潤ひがあつて、しかも物凄くない。子の『田舍敎師』及び『時は過ぎ行く』は、たとへば利根川の沿岸にひらける上州平野の靜息のすがたであらう。子の筆が平明であるのは、やがて子の見まもつて來た現實に幻想の混淆してゐなかつた證據ともならうか。さらに子の『蒲團』あたりから、あるひはもつとずつと初期の文藝倶樂部や國民の友

に發表した作品あたりから激して來た一筋の流れが、『殘雪』をも『戀の殿堂』をもあつめて、『百夜』にまで到達したのは、あたかも靜かな深い利根の河口のおもむきにたとへたい。『百夜』一篇は、最早子の誘惑ではなくて、教育である。感情の教育である。

思はずわたしはこんなことを書きつけた。わたしが日常用ふる晝寢の枕ですら、それの古くなつたのを光悅模様などのついた色紙で貼りかへて見たら、有合せの意匠ながらに何となくなまめかしい。戀でもなく哀傷でもない晝寢の枕ですらこの通りだ。まして故人となつた友の形見ともいふべき古き枕や古き衾にも譬へたい『百夜』のやうなやはらかな作品のはじに、こんな寢言を書きそへて序にかへることは、不似合な心地もする。

永の別離となつた床の上で、花袋子は自作の詩一首をわたしに贈らうと言つて、みづからそれをわたしに讀み聞かせて呉れた。

雨五六條春尙淺
鶯三四囀遶庭枝
點々隣家羨花早
雖有園梅我發遲

意の趣くところには、筆もまた隨ふともいふべき實に自由な書體で、この詩が半折の畫箋紙にしたためてあつた。格に入つて、格を出た人の到り得た境地だ。『百夜』一篇を貫く情熱と、何物にもこだわらないやうな作品のすがたとは、子が晩年の書風に似たものがある。思ふに、この作品は子の

ごとき作者にしてはじめて捉へ得る老境の心理を髣髴させてゐるものであるが、その靜かな落ちつきの底に、名狀しがたい嵐を感じさせないでもない。異常な天賦はあまり深く自省し得せしめたのだ。もしこんな嵐のないところに身を置いたならば、あるひはより愁ひのすくない日を送つたかといふに、晩年の花袋子に見るやうなあの至純に達し得たかどうかは言ひがたいと思ふ。

島崎藤村

百夜

島崎鷄二裝幀

『もう私もおばアさんになつたわね……』お銀はこの頃よくそんなことを言つた。手に把る鏡の中の姿が氣になるばかりでなく、これまで自分の通つて來た境遇や位置やら、またこれから過ぎて行かなければならない未來のことやらがいつもひとつとなつてその頭に簇がつて來るらしかつた。時には鏡の中にその顏を押しつけてもするやうにして、熱心にその眼やら眉やらを見詰めた。

『だのしかたがないよ。誰だつて同じだから――』

此方に長火鉢の前に坐つてゐる島田がかう笑ひながら言ふと、

『本當ね……。こればかりはしやうがないわね』

じつと鏡の中のその姿から眼を離さずに、むしろそこに映つてゐるのは自分ではないやうに、『ほら御覽なさい。こんなにシミが多くなつたから……。それに、

皺だつて多くなつたのね……』

『まア、そんなに氣にしない方が好いよ。そんなことを言ひ出しちや際限がない……』

『でも、この頃何うしても、さういふ氣がして爲方がないんですの、さうね、さういふ年になつたかも知れないのね。昨夜なんかいろんなことを考へ出して、たうとう一夜眠られなかつた――』

『さういふことがよくあるものだよ』

輕くなだめるやうにやつぱり笑ひながら島田が言つた。

『考へて見ると、丸で夢か何かのやうにして通つて來て了つたんですもの……。本當にのんきなものだと思ひますね。自分が何だかちよつとも知らずに、たださういふものだから、さうして通つて來たと言ふより外何にもなしに盲目でやつて來たやうなものですもの』

『誰だつてさうだよ』

『さうでせうか……』考へるやうにして、またじつと鏡の中の自分の姿を見詰めたが、いくらそんなことを言つて見たところでしやうがないと言ふやうに、鬢搔きで鬢を梳いて、そのふくらみ加減を何遍となく直して今度は髱のところを梳いて、やつとこれで好いといふやうにすつと立つて、襟のところを少し白くした顏を此方に向けてにつこりと艶に笑つて見せた。

これに限らず、お銀はよくそれに似た心持を島田に話した。

『もう、私といふ人もこれでおしまひ見たいね……。何つて言つたつてもう何うにもなりませんのね……』などと言つた。いろいろなことが一つ一つ皆な振返つて考へられて來るらしく、ことに長年住んでゐた土地の妓達の變遷が一層さうした深い反響をその心に傳へて來るやうに見えた。昨日もお銀は久し振りでその土地に行つて來たと言つて、ある待合のお上さんのことやら、梅龍といふ島田もよ

く知つてゐる妓の話やらを何彼とそこに持ち出した。

『あゝいふ稼業は何うしても薄情ね、それはね、別にさうするつもりもないのでせうけれども、ひとり手にさうなつて了ふのね……』などとも言つた。かの女と同年でその土地にゐる時分には何かにつけて常に競爭した政代といふ妓のことに關しては、『震災後、すつかり困つてゐるらしいのね。バラックは拵へたけれども、お金はなくなつて了つた上、あの、そら、あなたも知つてゐるわね、あの人に喰はれて了ふんでせう……。何うにもしやうがないので、何でもまたあの元の旦那と逢つてゐるらしいわ。あの旦那も旦那ね。あんなにひどい目に逢つてゐながら……』などと言つて笑つた。

二

お銀の言葉を透して、島田はその土地にもいろいろなことが起つたことを知つた。そこにも年は推し移りつゝあるのである。いつ推し移るともなく推し移りつつあるのである。それはたとへて見れば、靜かに微に動いてゐる廻り燈籠のやうなもので、正面に榮えてゐると見えてゐた舞臺が、いつとはなしに廻つて行つて、その現在活動してゐる人達すらそれと意識しない中に、いつか傍へ傍へ移されて行つてゐるやうなものであるのをかれは見た。

『さうかね。……もうあの人もゐなくなつたかね。好い妓だつたがな……。踊なんか踊らせると何とも言へないほど美しかつたがな』島田はこんなことを言つて、その身もその舞臺の役者のひとりであつた時分のことをなつかしさうに回顧した。

『それもあの震災があつてからね。何だかあれが大きなしさりになつてゐるやうな氣がしますね……』

『さうだね』

『別に、さういふわけでもないのでせうけれども、普通ならなし崩しに亡くなつて了ふところを、ガタリと來たので、それでさういふ風に一どきになつて了つたのかも知れませんね』

『さうかも知れない……』

『だから、あとに殘つてゐる妓のことなんかを考へると氣の毒ですよ……』流石に同じ社會の妓達が考へられるといふやうにしてお銀は染々と言つた。

ことに、義理堅くて、氣前が好くて、土地でも誰ひとりわるく言ふもののない、またその生活ぶりが派手なので誰でも有福だとばかり思つてゐた堺屋のおそでが、四十先になつて突然廢業して遠い田舍のさう大した財産があるといふでもない人に嫁になつて行くといふことを耳にした時には――また今年七十になる、吉原出の、その全盛の昔にあつては、何んなことでも思ふまゝに自由にならないものはなかつたといふその養母が、やつぱり止むを得ずに娘についてその遠い田

舍に行かなければならなくなつたといふことを耳にした時には、お銀もお銀の母親もかねて懇意であつただけに一層深い感慨に打たれずにはゐられなかつたのである。『あの堺屋なんか何一つ不自由はないと思つてゐたのに、やつぱりさう有福ではなかつたのかねえ……。氣の毒だねえ、それにあのおつかさんが――あの年になつて、そんな遠くに行くと言ふのは……。さうだらうともねえ、泣いてゐただらうともねえ、そんな田舍の土になるのはいやだと言つてゐたといふのは無理はないねえ』お銀の母親はかう言つて深い深い同情を寄せた。

『やつぱり、年を取つて、さういふ慘めな眼に逢はないために、そのためにあのお照さんやお定さんは、金本位で稼いでゐるわねえ……』

お銀はその周圍を見廻すやうにして言つた。

『なんて言つたつてお金だからね』

母親も考へ深く言つた。

『私なんか、震災前までは、ちつともそんなことは考へなかつたんだけども……。やつぱりさういふ時期に達したかしら？　だつてさうですものねえ、もう私なんか正面の舞臺にゐる人ぢやなくなつたんですものね……。いつの間にか傍へとやられて來て了つてゐるんですものねえ。だから、おそでさんだつて、四十先になつてもお嫁に行く氣になつたのね……。やつぱり女は、ひとりでは心細いのね。何んな人でも夫としてきまつた人を持つ方が好いのね』いつも出る言葉がまたしてもお銀の口から出て來た。

三

その言葉の中には、さうした社會に雜つて來たものでなければ本當に知ることの出來ないやうな細かい悶えと悲しみとが深く深く籠められてゐるのだつた。島田はそれに打突るといつも憮然とした。其處までは行きついても、それから先へ

は一歩も出て行くことの出來ない二人の身の位置を痛感せずにはゐられなかつた。

二人は默つてその言葉の齎らして來たお互ひの心の周圍をじつと見詰めた。

時には、しかし、もつと打開いた心持にならないこともなかつた。

『だつて、そんなことは何うでも好いのね……。いくら、さうなつたつて、心がそこまでついて行かなければやつぱり駄目ですからね』

『さうとも……』

『やつぱり人間はある程度で滿足することが肝心なのね……。それはお金のことばかりではないわ、心だつてやつぱりさうだと思ふの……。慾を渴いたらきりがないんですもの……』

『さう思つてゐるんだね……。しかたがないから……』

ある時は、かれ等はまたこんな話をした。

『ちつとも私、不足はないのよ。私、これで仕合せだと思つてゐますの。だつて、さうですもの……。それはね、あつちに行つていろ〳〵なことをきけば、それは仕合せな人はいくらもあるわよ。そら、あの小糸さん、あなたも知つてゐますね。あの人なんか、あんなにだらしがないのに、そら、いつかなんかは稲毛に行つて心中までしかけて、ボチャボチャ二人で入つて行つたけれども、急に死ぬのがイヤになつて、もうこんなことはよさうッて言つて戻つて來たといふ話、いつかあなたにもしたことがありますね、その小糸さんが今度はそれは好いんだつて言ひますからね。何でも紡績屋さんか何かで、非常に仕合せだつて言つてゐましたよ。でも、長く續くか何うか。それが疑問ね。何うしたつてさういふ社會にゐたものには長續きがしませんからね』さういふ話をする時には、いつでも二つの心が互ひに微妙に絡み着いて、感情に燃えた女の眼と眉とがそこに深い戀心を展げてゐるのを島田は歴々と眼の前に見た。お銀は靜かな聲で細々と話した。

やつぱりそれはさうした場合だつたが、かれ等はある時深い感激のエクスタシイに陷つたことがあつた。

『さうだ。私達だけは壊れなかつたのね。あの震災では、隨分いろんな人が別れたり何かしてゐるのに私達だけはびくともしなかつたわね……』かう言つてかの女は長く續いて來た二人の戀心を振返つて見るやうな眼つきをした。かれ等はそこにいろいろな光景を思ひ浮べた。互ひにぐれはまになつて、いかに合はせようとしても何うしても合はせられなかつた煩悶。二つが三つになり四つになつて、しまひにはひどくこんがらかつて何うしても解くにも解けなくなつたやうな時、ひよつくり本當の心が二人の心の底に觸れ合つて、そこから微妙な糸が引出されて行つた時の喜悦。震災のその三日目に女の身の上が案じられて、火のまだ燃えてゐる中をやつとのことで大川の橋杭の上をつたつて行つて行つた時の危險。それでも女は十時間も川水に浸つてゐたにも拘らず、何うにか彼うにか命だけは助

かつて、あの奥の料理屋の板敷の中に浴衣がけのまゝの安全な姿を見出した時の涙――さうしたことが今もはつきりと二人の眼に映つて見えてゐるけれども、かれ等はそれについては何一言も言はなかつた。生中何か言ふよりも、だまつてじつとその心に映つた繪を眺めてゐる方が、その方が、その時の深い感じにふさはしいやうな氣がした。

四

その多くの中のひとつの光景を二人はをりをり思ひ起した。戀もちかひも何も彼も皆な一時に破壞されて、場合に由つてはお互ひにお互ひの顔を見ることすら出來なくなつたかも知れない、その震災の水火の中を辛うじて逃れてはじめて郊外の小さな二階屋の一間にその身の安全を見出した時――ダイアの指輪や頭のものは命から二番目のものだけにそれでもやつと持ち出したけれども、あとは何ひ

とつ取り出したもののない身のあはれさを島田にしてもお銀にしてもつくづく深く感ぜずにはゐられなかつた。今まではそこにいろいろな色彩に濃やかに彩どられた身のまはりのものがあつた。役者の顔のくつきりと出てゐる夜着の袖があつた。柔らかく重ねた大縞の絹布があつた。行火にかけるために、わざわざかの女の娘時代の友禪の着物をそのまゝ小さなかけ布團にしたものがあつた。かの女がはじめて藝者になつた時に着た派手なお召をそのまゝ島田のどてらにしたものもあつた。原始的な美が何よりもすぐれてゐるとは言ふけれども、人工的な、繪畫的な、または粧飾的な色彩の中に、戀した女の白い肌や情を含んだ眼や美しく櫛の齒を見せた、水も滴るばかりの形の好い髪を見るといふことは、男性に取つて何とも言はれぬ喜悅のひとつでなければならなかつた。島田はその室を、長い間自分達のものにして來た室を、それはいろいろのいきさつもあつたであらうし、苦しみもあつたであらうけれども、兎に角さうしたものも皆んなその室の色彩の

中に柔らかに溶け込んで、一つの繪畫であるやうに、デコラチイブに二人の心持やら氣分やらを混ぜ合せてゐたのに――それまでにするのには並大抵の努力ではなかつたのに、一朝にしてそれが全く猛火の中に燒け落ちて了つたのは、島田に取つては、すぐれた藝術品を燒いて了つたのにもまして、たまらなく惜しく思はれた。そしてかれはその代りにガランとした安壁の黄ろいのを見た。幅も何もかけられてゐない床の間を見た。新建の長押に鉋のあとの凸凹してゐたのすらたまらなくわびしいのに、西日がカンカンと明るすぎるほど殺風景にさし込んで來てゐるのを見た。從つて今までの影の濃かな情緒とか、靜かな氣分とか、金紗や縮緬や珊瑚やダイアの上にひとり手に釀されて來る細かい心持とか、さういふものはいくら見出したくても何處にも見出すことが出來なかつた。かれ等はガサガサした空氣の中に、全く原始的といふよりも、さうならなければならなかつた空氣の中にわびしいかれ等を見出した。いくらか朝晩が寒くなつて來てゐる頃だつたの

で、木綿の二子縞か何かの、平生ならばそんなゴツ〳〵したものは肌に着けもしなかつたやうな不意氣な綿衣(わたいれ)をお銀は止むなく着てゐたのであつた。『こんな着物つきりまだないのよ……。近い中に、銘仙でも好いから一枚買つて來なければ……』それでもかの女はこんなことを言つて、別にそれを苦にしてゐるのでもなしに――寧ろさうなつた形に一種の興味でも感じてゐるやうに莞爾と笑つて見せた。しかも島田はその木綿の着物の上にまた木綿の薄べつたい坐布團の上に言ふに言はれないわびしさを感ぜずにはゐられなかつた。

『その代り、これからは何も彼も新しくするさ……』

二人はこんなことを言つて、わづかにその戀のわびしさをまぎらして見た。

五

『向うは下谷の藝者よ。何でも小今とかいふ人よ……旦那が始終自動車でやつて

來ますよ』

此方の二階からそつと向うの二階を覗きながら、お銀はよくこんなことを言つた。そこにはその小今といふ人の他に、妹の去年一本になつたばかりのがゐたり、元氣な、おしやべりのお酌がゐたり、道具なども燒かずに皆な出したと見えて、晴れた日には羽二重友禪の派手な襟當のついた夜着などが二枚も三枚もそこにつらねて干されてあつたりなどした。此方の二階のちよつと見たゞけでは堅氣としか見えないほどじみなのに引かへて、そこでは朝から晩まで美しい聲の音樂が漲つて、賑かな空氣があたりに滿ちてゐた。笑聲に變つて三味線の音などもきこえて來た。

『をかしいのよ、旦那が來ると、皆な近所で覗くのよ。何でも郵船の好いところをつとめてゐる人ださうですけれどね。でつぷり肥つた立派な體格よ。此間も隣の細君笑つてゐたわ。何うもあまり明け放しで困るつて……。見てゐられないつ

て……』

『下谷でも好い方なのかしら?』

『さア、何うですか。小今なんてあまり聞いたことはありませんけどもね……。あんまり好いところぢやないのかもしれませんね』

『でも、他のことは言はれないよ』

島田はかう言つて笑つて見せた。

『何うして?』

『だつて、此方だツて、やつぱり見られてゐるよ。また、あの二階に來てゐるなどと言はれてゐるよ』

『大丈夫よ』

お銀は注意深く何處からも見られないところの障子だけを五寸ほど明けて、そこから風の入つて來るやうにした。十月ではあるけれどもまだ障子や唐紙を閉め

て置くには暑かつた。二人は寝ながらよくその障子の明けてある方を眺めた。そこには一本の楊柳の樹の細い枝の緑の微かに靡いてゐるのがそれと指さゝれた。時にはその枝にさびしい雨が細く斜めに降りかゝつたりなどした。

何もないのが、室がガランとしてゐるのが、かれ等にはたまらなくわびしかつた。黄ろい大津の安壁貸家仕立の踏む度にカタカタするおかぐら二階、それだけは一日もなくてはいけないと言ふので取敢ずそこいらから買つて來た黄ろく塗つた安ものゝ佛壇、やうやく取出した一つ二つの先祖の位牌、さうしたものはいかにしてもかれ等の心持にそぐひやうがなかつた。言ふまいとしても水に近かつた涼しい以前の二階の話がかれ等の口に上つた。

『でも、そんなことといくら言つて見たつてしやうがないけども……』かういふ言葉で始まりつゝも、しかもその話がひとり手に何時までも何處までも繰返されて行つた。かれ等は河から來る風の涼しかつたことを話した。露路を入つて行くと

突當りに湯屋があつて、よくそこに朝湯に出かけて行つたことなどを、かれ等は話した。

二人は黒檀の煙草盆の代りに西洋皿の縁の缺けたのを、アカの湯わかしの代りに土器に近い土瓶を、柾の見事に透つてゐる桐火桶の代りに瀬戸の粗末な火鉢を、おそろひの組みの藍色の見事な湯呑みの代りに縁のかるくザラザラした小さな細長い茶碗を用ゐなければならないわびしさを感じた。否そればかりではなかつた、平生美しい着物にのみくるまつてゐたかの女が木綿の縞のわた入を着て、髪も結はずに近くの町の通りなどを歩いてゐるのなどにひよつくり出會はすと、島田は何とも言はれないあはれさを身に覺えずにはゐられなかつた。

六

やはり震災から避難して來た人で、夫は自動車で新大橋の橋際まで行つてそこ

からあとはわからず、住居は勿論のこと自分の持家もすつかり燒けて、たゞ湯島の妾宅だけが纔かに殘つたといふ、相應によく暮してゐたらしい五十近い品の好い主婦が、二三人の子供と一緒に悲しいおどおどした不安な生活を送つてゐたが、そこへもお銀は懇意にしてよく出かけて行つた。それはちやうど筋向になつてゐるやうなところで、この頃では奥さん、奥さんなどと言つて向うからもその長女がよく妹達を伴れてやつて來たりなどした。その話をお銀はよく島田に持ち出した。何でも兜町などにも一時は關係し、相應に財産も出來て、その方面では誰も知らぬものもないやうな人だつた。現にこの二階屋の持主の爺などもよくその内輪を知つてゐて、『あれであのお上さん中々えらいんです……。あの人達はもとは名古屋あたりから出て來たのですが、今から十年前は路ばたで物を賣つたり何かするほど困つてゐたんです。その時分からあのお上さんがえらかつたのですよ、身代の出來たのは、半分以上あのお上さんの力だと言つても好いんです……。それ

がお氣の毒さね。喉元過ぎれば暑さを忘れるといふ譯でもないでせうけれど、旦那は妾などを持つて、それで一苦勞してゐると、またこの災難ですから……』などと話した。お銀はその妾に對し、またその本妻である主婦に對し、さうしてその旦那が亡くなつた後の生活といふことに對し、またその本妻の主婦がこの場合妾といふものを何う取扱ふかといふことに對していろいろな形で興味を持つた。不仕合な主婦にも同情が出來ると共に、跡始末の思案に餘つてをりをり訪問して來る妾にも心が引かれた。『それでも奥さんは親切にしてやつてはゐるやうですよ。それはね、一時はひどい競爭で、油と水のやうに何うしたつて混り合ふことが出來なかつたのださうですけれど……。昨日も來てゐましたよ。何でも濱町倶樂部か何かの女中をしてゐたのださうだから、ちよつとした好い女ですよ。それに此方には女の子ばかりですのに、向うには今年七つになる男の子があるんですつて……。ですからね』お銀はちよつと言葉をきつて、『奥さん、親切にはしてゐ

るさうですけれども、やつぱり底はぴつたり合つてなんかゐやしないんですね。その次行つた時、奥さんは、あんなにしてやつて來たつて、何うなるもんですか、それよりも此方の方が可哀相なんですからねッて言つてゐましたよ。お妾さんも可哀相ね』お銀はさう言つてあとを默つた。島田にはお銀の心持がよくわかつた。

『何うも、しやうがありませんね、誰でも皆さうなんですね』

暫くしてから考へ深くお銀は言つた。

ある時はそれだけ言つたぐらゐでは滿足が出來ないといふやうに、『やつぱりあなたの奥さんだッて私に對してはあのお向うの奥さんと同じでせうね。何うしたつて駄目ね。何んなに此方が好意を持つて行つたつて駄目だわ。私だッて惡人ぢやないと思ふし、こんなにあなたのことを考へてゐるし、あなたの奥さんだつて、そんなに憎いわけはないと思ふんですけども、……やつぱり駄目なんですかね。可愛い夫を寢取つた憎い憎い女なんですかね。それを思ふと悲しく悲しくな

つて……』さう言つてゐる中に急に胸が一杯になつたらしく、涙がほろほろと疊の上にこぼれた。

『まア、好いぢやないかそんなこと――』島田はなだめるやうに言つた。

『だつて、私、昨夜そのことを考へて、終夜眠られなかつたんですもの……。でも、誤解してはいやですよ。だから、小そでさんのやうにお嫁に行きたいなんて思つてゐるんぢやないんですから……。たゞ、それほどまで私が思つてゐても、何うにもならないと思ふと悲しくつて……』お銀は後には兩手を顔に當ててすゝり上げた。

七

『お向うの奥さんも、そのお妾さんのためには隨分苦勞したらしいのよ。何しろ男の子がゐて、旦那は始終そつちに行つてゐたんださうですから――』

かう自分の心をその中に雜ぜたやうにして言ふのを、

『でも、さういふ成行なんだから爲方がないぢやないか』

島田が遮るやうに言つたので、一層それを問題とするやうに、『だから、今はあの奥さんが永年のかたきを討つてゐるやうな形よ。お妾さんだつて困るんでせう。金といふほどの金は持つてゐないんですつて……。だから、男の兒にいくらでも教育費を心配して貰ひたいやうに言つてゐるんださうですけれども、お向うの奥さんもうんとは言はないらしいのね』

『旦那の生きてゐる中に、ちやんとして置かなかつたのかね。さうすると、そのお妾さんもさう辣腕ではなかつたと見えるね』

『あなたはぢきさういふ風に仰しやるのね。男の子でもあれば、女は旦那にすつかり縋る氣になりますからね。ふだんはそんなこと考へてゐやしなかつたんでせう……。旦那のお腹の内にだけこつそりいろ〳〵なことが藏つてあつたんでせう

ね……。私だつてちつとも違ひはしないわ。さういふ時期が一度はきつと來るんですからね』

『いやに、じみなことばかりこの頃は言ふぢやないか。何うかしたね。これもやつぱり震災の影響かな』

『そら、すぐあゝいふ風におちやらかして了ふんですから、此頃はあなたはもう大丈夫だと思つて、ちつとも何とも思はなくなつたのね。私の方があべこべになつちやつたわね』

『まア、そんな取越苦勞はしない方が好いよ』

『取越苦勞ぢやないのよ。これで私があなたのお宅にも行けるし、奥さんともご交際が出來れば、さうすればいくらか安心してもゐられるんですけれども、それが丸で出來ないんですからね。でももうよすわ。そんなことといくら考へたつてしやうがない……』かう言つてお銀はその話を打切つた。しかし島田の頭の中には

それが有效にはつきりと殘つた。かれも自分達の戀愛の總決算がいつかは一度必ずやつて來ることを思はずにはゐられなかつた。敢て古い歴史を持出すまでもない。今現にそこにもこゝにもさうした戀の址がある。草が生え鶉が鳴くやうな戀の址がある。何んなに愛してゐたとて、何んなにしつかり、心と心とを合はせてゐたとて、その址になる時は屹度來る。(さうして見ると、戀といふものは火花を散らす時だけのものか。その時だけを尊重して、あとは金屑として捨てゝ捨て去るべきものか。自分等のは餘りに拘泥しすぎてゐるのか。執着ならまだ好いけれども、それを通り越して、ひとつの習慣といふものになりつゝあるのではないか。)その日島田はそこから電車への道を歩きながら、獨りさうした考へに耽つた。自動車や車や荷馬車がガタガタとしつきりなしに通るやうなところであつた。トラックがをりをり地響きをさせてあたりを威壓するやうにして通つて行つた。

(そんなことはない、そんなことはない、これは俺達の戀の意志だ、あの震災に

さへ壞れなかつた俺達の戀の意志だ。そんなことで何うにもなるものではない……。まだ俺達の戀の火は燃え切つてゐない、これからもつと燃える！　燃える！)

電車を待つ間、島田はこんなことを考へて立つてゐた。

八

夜、お銀はその電車の停留場まで送つて來たりなどした。

『本當に氣をつけて下さらなくつては駄目ですよ。あなたに事でもあると、それこそ私達は大變なんですから』

『大丈夫だよ』

『でも、此頃はそこの通りはひどいですもの……。つい、今朝も乘合に誰かが轢かれたと言つてゐましたよ』

『大丈夫だよ』

島田はかう言つたが、『しかし、實際あそこの通りはひどいね。嶮しいとこでも通つてゐるやうな覺悟が入るね。トラックなんかのべつに通るからね』

『本當ですよ。それに、乘合が隨分幅をして通つてゐますからね』

その明るい賑かな通りまで出る間には、ちよつと草場のやうな、畫間はそこで學生が球を投げてゐたりするやうなところがあつて、そこがちよつとさびしいので、お銀は父親の平生持つてゐる懐中電燈を借りてそれを持つて來たりしたが、

『何アに、大丈夫よ、何か出たら、これで嚇かしてやりますから……』かう言つてそれを二三度光らして闇を照して見て、『これをつきつけてやれば、ちよつとびつくりしますからね、そのひまに遁げるから大丈夫よ』

『さう旨く行けば好いがね……』

『行きますとも……』

『でも、もう好いよ。そこのところで好いよ』

その草場のところに來ると、島田はいつもきまつて女の來るのをとめた。と、お銀は、『さう、それでは今日は失禮するわ……。本當に大事にして下さい……』かう言つてそこから歸つて行くこともないではなかつたが、その時には五六歩行つてから互ひに振返つて、闇の中にその黑い影を見たり、下駄の音の遠くなるのに心をさびしくしたりして別れて來るのであつたが、しかし大抵は、『でも、本當にさみしくも何ともないのよ……』とか、『でも、今日は次手にちよつと志摩子の靴下を買つて來なくつてはならないんですから』とか言つて、そして却つてそのさびしい草場の闇の中を二人の世界でもあるかのやうに徐かに街の灯に向つて並んで歩いて行くことを喜ぶやうにした。かれ等は闇に手を感じ合はせて見たりなどした。

『でも、退屈だらうね』

『私……』

『あんなところに、一日引込でゐるんだから……』
『そんなことはちつともありませんねえ。この頃は丸で變つた人のやうになつてゐるんですもの……。お勝手元はするし、洗濯はするし、夜だつてそんなに早く寢たことはありゃしませんし……』
『それは外形はさうだらうけれどもね……』
『外形でなくつたつてさうよ。他のことなんかもうちつとも考へてゐやしないんですもの。あの社會のことなんかもうちつとも頭にないわ……』
『でも、退屈ぢやないかしらと思つてね……。本でも讀むと好いんだけれどもね……』
『本を讀むつもりよ、此頃は……』
『その方が好いね。本を讀むと、いろいろなことがわかつて來るからね』
『本當ね』

こんな平凡な何の奇もない言葉がいつも二人の間に取交された。これでも嘗ては火花を散らしたことのある戀人同士であらうかと思はれるやうな靜かな落附いた言葉が……。次第に街の通りの明るい灯は近づいて來た。

九

『それで、もう、大抵不自由なものはなくなつたかね？』
『え、もう大抵――』
此頃では曲りなりにも道具や種々なものが揃つたとお銀は言つた。
『でも、私達なんか好いんです。今度の震災では、いろんな眼に逢つた人がありますからね……』
『それはさうだよ』
『母さんにしても、父さんにしても、だから本當に心から喜んでゐるんですの、

あなたといふ人がもしかゐなかつたら、私達はそれこそひどい目に逢つたらうつて始終言つてゐるんですよ』

『そんなこともないだらうがね……』島田はさういふ眞面目な話をわざと他に外らすやうにして、『この頃やつぱりあの郵船の旦那來るかね？』

『お向うの家？え、來ますとも……。あそこではもう評判になつてゐて、自動車さへ留ると、皆な言ひ合はせたやうに眼で合圖してゐるんですもの……さう、お話しなかつたわね、何でも三味線彈き見たいな男があの人のところに來るのよ。今日は來てゐましたよ。たしかにさうよ。表から自動車が入つて來ると、裏からすうとその男が遁げて行くッていふ話ですよ』

『さうかね、やつぱり……』

『何うしてもさうなるのね。お金と心と一緒になれば好いんだけども、何うもそれがうまく行かないのね。それに、此頃は裏の坊主の學校の學生が石塀を乘り越

して二人も三人もあそこに出かけて行くのよ。夜は賑やかよ。あの妹だのお酌だの、一緒になつて騒いでゐるのよ』

ちやう度其時、その草場が盡きて、向うに一條の明るい眞直な通があらはれて來たのでその話は切れた。二人は默つて並んで歩いた。場末の通りではあるけれども、此頃は人が多く避難して來てゐるので、あたりは混雜返しに、トラックや自動車が夜でも引きりなしに通つて行つた。と、その度毎にお銀は島田の袖を引張るやうにして、『それ、危ない！』と言つてそれを左側に避けさせた。

灯がいろいろな光線を、歪んだ光線を、眞直な光線を、兩方から雜合つたやうな光線を高い低い屋並の不揃ひな眞直な街に投げた。そこにはそば屋があつたり、安物の反物を並べた店があつたり、小間物屋があつたり、石の門のけばけばした醫者の家があつたり、時には半ば腐つた魚も並べられてあるやうな肴屋のくさい店などもあつたりして、それが混雜とその郊外の電車の停留場へ續いて行つてゐ

るのであつた。

小間物屋の前を通る時、『もう好いよ、此處で買ふんぢやない？』かう島田は注意した。しかしお銀は一緒に並んで歩くことをやめなかつた。何んなに少しの距離でもさうして一緒に並んで歩いて行きたいやうに島田には見えた。島田は一種のいとをしさを感じた。

その町の通りを左から右へと貫いて電車の線は眞直に通つてゐた。二三分ごとに頻繁に通る電車ではあつたけれども、その時まだそこにはやつて來てゐなかつた。やつて來てゐるやうなうなりも空に傳はつて來てゐなかつた。『もう好いよ……』そこに來て島田は小聲で言つた。

でも、お銀はぐんぐんついて來て、そのまゝ線を覗くやうにしたが、

『あゝ來た……』

と言つて、遠くに赤くぴかりと光つて動いて來てゐる大きな、ヘッドライトを

島田に示すやうにした。電車はやがて近寄つて來た。

『ぢや、氣をつけて！』島田が乘らうとする後にさうしたお銀の聲がきこえた。

一〇

島田はその郊外の新開地のガサガサした空氣を、川近い靜かな、二階にゐても時々櫓の音の聞える、雪の日などは紺蛇の目の傘や黑ぬりの女の足駄の美しい、古風な小唄にうたはれてゐるやうな感じの今だに殘されてある以前の土地に比べないわけには行かなかつた。かれは朝ごとの散歩を樂しんだことを思ひ出した。女を二階の羽二重友禪の襟當のかゝつた厚い夜着の中に寢かして置いて、そつとそこから階梯を下りて、表の格子のかき金を外して、つめたい朝の空氣の中に出て來ることを樂みにしたことを思ひ出した。その時分にはまだ何處の家もぴつしやりと戸を閉めて眠つてゐて、蜜柑の皮や毛糸や新聞の屑などの地べたに散らされ

てある上に朝霜の白く置きわたしてゐるのを目にしたことを思ひ出した。ある時はその土手に上つて行かうとするところに少しばかり殘つてゐる篠笹があつて、その亂れた叢の中に昨夜サラサラと音を立てゝ降つた霰の珠がそのままにかたく凍てついて殘されてゐるのを目にしたことを思ひ出した。またさういふ朝には、川はきまつて美しいイタリアン・プリウに刷かれて、夜から朝になつたばかりの氣分がすつきりとあたりに漲つてゐるのを常としてゐたことを思ひ出した。かれはいつもじつとしてそこに立ち盡した。

それに、さうした習慣が長い間續いた故か、かれはそこらにゐるいろいろなものを知つてゐた。丸で知らない人達ではあるが、その人達の生活をよく知つてゐた。土手を少し向うに行つたところにはめづらしく夙起の藥屋があつて、そこにはお爺さんがゐた。小づくりのにこにこした好いおぢいさんで、その人はいくら早くかれが散歩に出かけて行つても、きつともうそこに起きて坐つて火鉢を抱へて

ゐるのが常だつた。かと思ふとその少し此方に荒物屋があつて、そこでは煙草を賣つてゐた。島田はいつも土手から下りてそこで煙草を買つた。と、屹度そこの娘が今起きたばかりといふ格好でそこに出て來て、銀貨を受取つて、錢の入つてゐる箱をかき廻して、つり錢があれば好いが、それのない時には、ばたばたと奥へかけ込んで、朝の支度をしてゐる母親の方へとそれを貰ひに行つた。それに限らず、かれはそこらに生活してゐるさまざまの人達のことに熟してゐた。豆腐屋の上さん、牛乳屋のあるじ、新聞配達の苦學生――さういふ人達と比べて夜の世界の人達の派手な美しい歡樂の他には何物もないと言つたやうな生活をしてゐるのをかれはをりをり引比べて考へて見たりなどしたことを思ひ出した。『それで好いんだ！　それで好いんだ！　そんなことは考へる必要はないんだ！』かれはさういふ風に自分で自分の考へを打ち消さずにゐられなかつたことを思ひ出した。

（兎に角、しかし不思議なことだ、誰も知つてゐる人があるのではなし、全く知ら

ない土地、全く知らない人、もしもかの女がある土地から此處に來なかつたならば、一生經つても知らなかつたやうな土地、その土地に住んでゐる人達の生活をかういふ風に知るといふことは不思議なことだ……）こんなことを思ひながら、島田はよくその街の細い通りから細い通りへと歩いて行つた。かれはその土地のあらゆる街の角、垣に添つた道、榛の竝木に沿つた汚ない青苔の生えた溝、そこから土手の方へと出て來る道、その奥の方に何軒となく綠葉の中に埋めかくされてあるやうに出來てゐる瀟洒な別墅風の庇の低い家屋、そこにもこゝにもかの女とかれとのあとを殘して來たことを島田はいつもくり返した。

一一

從つてその土地では人の知らないやうなことにもかれはよく熟してゐた。あそこの角にあゝいふ家がある。あそこには十六七の粹な娘がゐる。またその此方に

は長唄の師匠があつて、それが中々のヤリ手で表面はおとなしさうでゐて、存外いろいろなことをやつてゐる。自分の敎へてゐる藝者にも二三人は關係してゐる。その横道の突あたりは痴呆がゐて、平生はおとなしいが、何うかすると、何かの發作で大きな聲を立てゝあたりの人を困らせてゐる。見番のをばさんはその見番を組合に讓り渡すについて二萬圓以上の金を受取つた。その組合はそれを自身で經營するために土地の藝者に義務株をきまつた數だけ否應なしに持たせたので、いろいろな苦情が起つて困つてゐた。お照といふ土地で古い姐さんは、金は澤山持つてゐるが、底意地がわるくつて、表面は如才のない口をきいてゐながら、裏に廻ると隨分人を陷れるやうなことをするので何ぞと言つては評判がわるかつた。否、そればかりではない、その細い露路が何處に何う拔けられるか、その拔けて行つたところから向うは何うなつてゐるか。そこから川の方へは何う出て行かれるか。その川の岸にある大きな二階の藝者の許には、時々田舍から大盡

が出て來るので、その間は男は來ぬ筈になつてゐるのであつたが、何うしたいきさつかある夜その男がこつそり來て寢てゐるところをその大盡に發見されて、えらい騒ぎになつて、殺すの生かすのと刄物まで持ち出したので、多勢の抱妓やお酌が蒼青になつて戰へて隣へと逃げて行つた。かれはさうした社會の人達のことをすべてかの女を透してよく知つてゐた。

またいろ〳〵な妓達をも知つた。間接に、また直接に、恐らく島田はそこから人生の底の底に觸れて行つたと言つて好いかも知れなかつた。兩性の戀といふものゝ何うにもならないことを知つたと言つても好いかも知れなかつた。島田は此間お銀と一緒に出かけて行つて、震災後いかにそのあたりが慘めに廢址になつてゐるかを見て來たことをくり返した。燒け落ちたまゝの瓦、やけたゞれて赤くなつたトタン、あたりは何も彼もまだそのまゝで、纔に見番のをばさんのバラックが一軒わびしくそこに建てられてゐるのを見たばかりであつた。

そこで島田は、お銀と一緒に休んで、見番のをばさんと一時間ほど話した。あとのことはまだ何うにもならなかつた。何うなるだらうといふ見當もつかなかつた。それはいづれは元のやうにはなるだらうけれど、何ういふ風に復興されるか、もとの樣な賑やかな土地になるか、それとも全く今までとは違つたものになつて了ふか、それはちつともわからないといふことであつた。見番のをばさんは半ば絶望したやうな口吻で、『それは私はこの土地の主のやうなものだから、私が一番先きにバラックでも建てなければ、誰だつて尻込みして此處に寄り附きはしませんからね……。何を抛つて置いても、バラックだけはと思つて、それで、こんなものでも建てたのですよ』と言つて、一刻も早く此方へ戻つて來ることをかれ等にも勸めた。島田はお銀と一緒に、その燒け落ちたまゝになつてゐるところへと行つて、何とも言へぬ心持で、感慨無量で、じつとそこに立ち盡した時のことを思ひ起した。かれ等に取つて、再びそこにその二階屋を打建てるといふこと

は全く夢のやうな希望であつた。かれ等はぼんやりとして默つて立つてゐた。それは初冬にしてはめづらしく朧ろに月が霞んで、しんとして、何處からともなく燒け埃の微かににほつて來るやうな宵であつた。

一二

その時見番のをばさんの言つた言葉は後になつてもかれ等の頭に殘つてゐるやうなことが多かつた。

『何うしたつてしやうがないものですね。かうした社會でも眞面目でゐた人とさうでない人とはかういふ時にわかりますからね。第一旦那からわかつて來ます。好い旦那を持つてゐたか、また平生好加減に旦那を取扱つてゐたか、さういふことからはつきりとわかつて來ますよ。この土地でも、隨分、旦那を粗末にしてゐた姐さん達がゐるんですからね……。爭はれないものですよ』

『それは何うしてもさうなるのね』

『大きな聲では言へないけれども、あの春代さんなんか御覽なさいよ。普通見てゐて何うしたつて世話をしなきやならない人が澤山ある筈なんだけれども、ひとりだつて親身になつて、出て來て、世話をする人なんかないんですから……』

『あの紡績屋さんは？』

『あの人なんか怜悧ですからかういふ時に手を出すもんですか』

『では藥屋さんは――？』

『あの人なんか顏も見せやしないさうですよ……』

『あの人が？　まア、さうですかね……』お銀は呆れたやうに言ふと、

『だつて、それは春代さんの方にもさうされるわけがあるんですもの』見番のをばさんは長い間見て來たさういふ人達の浮沈をそこに一どきに思ひ浮べたといふやうに、『やつぱり眞面目にじつちにやつたものでなければ、駄目ですねえ。鍍金

ではいざといふ時には剝げて役に立たなくなりますからね……。私なんか隨分長いことさういふことを見て來ましたよ』

『それはさうでせうね』お銀は感慨深く調子を合せた。

『何しろ、堀の藝者のゐた時分から、私は却つて此處の方が望みがあると思つて、移つて來たのが始めなんですからねぇ——その時分は藝者屋だッて、二三軒しきやありやしないんですから……。堺屋さん岸本と日の出屋と……。それはさびしいものでした。ちやうど今見たいなものでした。それを思ふと、私なんかも隨分長くいろ〳〵な目に逢ひ逢ひ、よく此處まで生きて來たと思ひますね……。この土地だッて、これで二度も三度も變遷がありましたからね。折角いくらかよくなつたと思ふと、不景氣ががたりと來たりして、震災前のあの景氣になるのには並大抵ぢやなかつたんですのに——また、こんなになつて了つて……』

『でも、をばさんなんか?』

『ところがさうでないのよ。これまでにした土地が燒野原になつて了つては、見てゐられないからね。何うかして、もう一度もとのやうにと思つて——』そこに住んでゐた妓達のこともあるが、それ以上にその土地の發展にのみ心を碎いて來た見番のをばさんには、たとへ復興が出來たにしても、容易にもとのやうにはならないといふことが絶えず苦勞の種になつてゐるらしかつた。

『』島田はその時つくづくさういふ社會の底の底まで見たやうな氣がしたことを思ひ起した。派手な色彩と賑やかな音樂と美しい姿とのみにあくがれて來たかれにしても、いつの間にかその底に流れてゐる止むに止まれない不可思議な澱みにその身を任せなければならないことを痛感した。かれはこれまでにも何んなに多くの美しさを見て來たらう。魂も身も恍惚とするやうな艶やかさに觸れて來たらう。その色戀のためには、百年の命を半分に縮めても——否、この歡樂のためには明日この身が滅びてもと思つたことも一度や二度ではない。しかしさうした美し

さも艶やかさも今日は何處に行つたであらうか。あと形もなくなつて了つたではないか。たゞ燒野原があるばかりではないか。その燒野原の中にところどころバラックの灯が見えて、土手にのぼれば、川が白く流れてゐるばかりではないか。

一三

かれ等はその戀の廢墟を通りでもするやうに、徐かに、默つて、それでゐて、心はぴつたりと觸れ合つて、今までのかれ等のあらゆる戀の繪卷の中でも、ことにすぐれて深い色彩で塗られてゐるやうな光景をそこに展げながら、身を寄せるやうにひたと竝んで歩いて行つた。

お銀は此頃やつと拵へたらくだのコオトで初冬の夜の寒さを纖かに凌いでゐるやうに見えた。

人間といふものは、何にも言へないのだといふことを、細かく觸れ合つた氣分

や微妙に雜り合つた心持などは口では到底言ひあらはすことの出來ないものであるといふことを、島田はこの時ほど深く考へたことはなかつた。何か言つて了へばその氣分は忽ち亡くなつて了ふのである。その言葉のために忽ち普通の氣分に化せられて行つて了ふのである。何んなに深く微妙に思ひ合つてゐたと言つても思つてゐると言つて了つては——また普通戀するもののするやうに口を持つて行つたり手を重ね合つたりして了つては、それでその空氣は忽ち何んでもないものに化せられて了ふのである。島田はその時ほど默つて竝んで歩くことの、たとへば寶玉のやうに尊い時間であつたことを繰返さずにはゐられなかつた。その沈默の中にこそかれ等の戀があるのである。何物にも破壞されずに——この大きな震災にすら破壞されずにかうして續いて來たかれ等の戀があるのである。それは手だの口だのでそのまゝ平凡にして了ふのはあまりに惜しい空氣であつたのである。

焼け埃のにほひが三月經つた後でも、まだその時のさまを思はせるやうにあたりに漲つてゐるのを、かれ等は染み染みと身に感じた。寒さと戀心と悲しさとに雜り合つたその匂ひ！　それこそ戀をするものの當然いつかは嗅がなければならない埃塵（はこり）のにほひではないか。そのにほひの中にあらゆる享樂が一つ一つ陷沒されて行つて了ふのではないか。しかし島田はたゞさう考へただけだつた。それをお銀には言はなかつた。

二人は少し此方に來たところでこんなことを言つた。

『まア、もう少し經つて見てからでなければ駄目ですね……』

『さうだね』

『まア、あのまゝにして放つて置きませうかね？』

『まア、好いぢやないか。そんなに齷齪しなくつたつて……。もう少しじつとして落付いてゐるサ。その中には本當のことがわかつて來るから……。かういふ時

には、餘りあせるのは損だよ』

『さうね』

それきりだつた。また暫く默つて歩いた。

島田はかの女のためには力を惜しむまいと思つた。かの女の生活は取りも直さずかれの生活だ。それは今までとて中途半端でやつて來てはゐないが、これからは一層力を盡さう。かう昨日も思つたことを島田はくり返した。路はいつか大きな石の鳥居のあるところを通つて、キラキラと月の光に碎けて水の流れてゐるのを前にしながら次第にその震災の日何百人と知れずに溺死した岸の方へとついて行つてゐた。いつもなら、そこには車や自動車の一二臺は屹度あるのだが、その時にはとてもさういふものをもとめることは出來なかつた。しかしその夜路はかれ等に取つて決して樂しくなくはなかつた。かれ等は橋を渡づて雷門へと行つて、そこで何か暖かいものでも取らうとしてゐた。

一四

お銀の父母にしても此頃では丸で違つた人達だつた。もはや向うにゐた時のやうな強さも皮肉さも持つてゐなかつた。天災といふものが、かうまで人間を變へて了ふものかとさへ思はれた。『もうこれからいくら一生懸命になつたところで、元のやうになることは出來ませんからねえ。もうこれでおしまひですよ』氣の勝つた母親ですら口癖のやうにこんなことを言つた。

江戸の眞中に大きな呉服屋として名を知られてゐたその家が五年か六年かの間に滅茶々々に潰れて、家屋敷も人手にわたつて、後にはその月々の生計にすら困つて、娘がそれを見兼ねて、自分から望んで狹斜の巷に入つたといふのも、それも誰がわるいのでもない。父親が意氣地がないからでもない。またその代々信頼して使つて來た番頭がわるであつたためばかりでもない。父親母親といふ人が何

方かと言へば浮は氣で、役者が好きで、可愛い父親の弟にあとを繼がせたいために種々な畫策をやつたゝめばかりではない。ひとり手にさういふ時期に達して、誰とて免れることの出來ない盛衰の運に出會して、それでガタガタと屋臺骨まで潰えて行つて了つたのである。母親は此頃ことによくその昔のことを話すやうになつた。『本當にさうですね、好いことかわるいことか知らないけれども、さうなるやうに、もう代々白蟻が大黒柱を喰つてゐたんですね……。だから今になつて考へて見ると、誰を恨むこともないんですよ。お銀だつて、小さい時から、さういふ目に逢つて、可哀相だと言へば可哀相でしたけれど、別にこれと言つて不自由はしませんし、震災にあつても、あなたのやうな方のおかげで、他の人達のやうにまごまごしないですみましたし……まア不仕合と言へば不仕合でせうけれども、人間は慾を言へば限りがありませんからね……』いくらわくわくして見たところで人間には何うにもなるものではない、なるやうにしかならないと言つたやう

な調子で、徐かに落附いて母親は話した。

島田は島田で、その話が出ると、そのお銀の生れた時分のことをよくそこに持ち出した。島田はそのころ十六ぐらゐだつた。まだその呉服屋が榮えてゐる頃で、お銀が生れた時には、初孫だと言ふので、あちらこちらから澤山祝物が來て產室が反物や產衣や眞綿で一杯になるほどあつたといふが、その頃島田は小倉の袴を裾短かに穿いて、朴歯の足駄を鳴らして、それからそれへと東京の市街をほうつき歩いてゐたものだつた。『あゝ、さうでしたね、憲法發布の日、あの前の日にお銀が生れたのですが、ちやんと覺えてゐますよ。朝の中に雪が降りましてね。寒い日でした。めでたい日だといふので、何處の町でも催し物などがあつて、日本橋の大通では、おかる勘平の道行の假裝行列のあつたのを覺えてゐますよ……』こんな風に島田が話すと、母親は思はず膝を乘り出して、その時、その行列を、ぬかるみの中を練るやうにして歩いて行くのでおかるの顔が泥まみれになつてゐ

るのを二階から笑つて見てゐたといふのであつた。勿論これは今が始めてではなかつた。前にも度々話したことがあつた。しかし何遍繰返しても、その時分のことは思ひ捨て難いといふやうにしてかれ等は話した。

『でも、さういふ話は、もう誰も知つてゐるものはありませんね……何しろ隨分遠い話ですものね。何だか、そんな話をきくと變な氣がする……』お銀はいつもかう言つて段々その話の中に雜つて來て、自分が里子に預けられた南仲通の鹽野のお婆さんの話などをそこに持ち出した。

一五

『不思議なものですね、人間の世の中といふものは！』

その昔話を一まとめにしたといふやうな調子で、何うかすると、母親は半ば嗟嘆するやうにして言つた。

『本當ですね……。誰にも皆な同じやうにさういふことが一度は考へられて來るんです……』

『でも先生なんかまださうでもないでせうけども……』

『いゝえ、やつぱり同じですね……。もうさうなつて來てゐますね……』

『姪だの、甥だのも皆な大きくなつて、一番お終ひのやつさへ、もう他のお嫁さんになつてゐるんですからね。ひよいと自分で自分のことを考へて、びつくりするやうなことがよくありますよ……。私だつて苦勞は隨分して來たんですからね。この瀨戸際だけは何うしたつて通らなけりやならない。どんなに波が荒くつたつて無理にでも通らなくつちやならない……。かう思つて、是が非でもといふやうにして通つて來たこともあるんですからね……。ところが、それを通つて來て了つて見ると、何もない。あとには何も殘つてゐはしない。丸でいろいろなものをいつの間にか一つ一つ路傍に置いて來たやうなものですからね。……。考へ

るとつまらない――』

『誰だつてさうですね』

『人間だの、世間だのつて、つくづく不思議なものだと思ひますね……』

母親はそれに近いことを言つてよくあたりを見廻すやうにした。お銀の妹のお糸は姉と同じやうに容色が好く、向うの土地にゐる時分にも、桐屋では何うしてあの妹に藝を仕込まないだらう。藝者にはしないつもりなのかしら？　などとよく評判されたものだつたが、妹だけは自分に引くらべて何うしてもさうした空氣は吸はせたくないといふ姉の希望で、全く地道に女學生上りに仕立てゝ、幼馴染の青年の許に早くから嫁にやつて、今では三人の女の兒があり、その總領志摩子は現にお銀が養女として貰つて育てゝゐるのであつた。震災の時にも、暫らく此處に同居してゐたのであつたが、つとめる場所が出來たので最近別に澁谷の方で家を持つことになつた。その妹夫婦に對しても、母親はもはや以前のやうな深い

愛の執着を持つてはゐなかつた。『もう三人の子持だからね。さう心配したつてきりがない。それよりも家にゐる人の方のことが大事だ……』かう言つて却つてお銀の方に同情した。

『でも、お前は仕合せだ！　何と言つても好い先生を持つてゐる。その方は心配はない。たゞ私が死んだあとで、志摩子に餘り力を入れすぎないやうになさい。志摩子にはいざと言へば本當の父母がついてゐるのだから、さうお前が力を入れて育てなくつても好いのだから……。ねえ、先生、私だつて親ですもの、この子に誰かきまつたものをひとり持たせたいと思はないことはなかつたのです……。そのため、いつか先生にも不義理な眞似をしたことがありました……。然しもうさういふ時期も通り過ぎました。今更ひとり持つ年でもありますまい、ねえ、お銀……。不仕合と言へば、それがお前の不仕合だよ。しかし運だと思つてそれはあきらめて貰ふのだねえ。その代り先生にはよくお願ひして置くから……』など

と靜かな落付いた聲で母親は言つた。或はお銀の心持の地道に素人臭くなつて來たのも、さうした母親の眞面目な心持に誘はれたのかも知れなかつた。

『でも、お前は親子の緣が深いんだよ。何處の家の娘だつて、嫁に行つて了へばもう先方のもので、ちよつと來るにさへ自由にはならないのに、お前はかうしていつまでも親と一緒にゐられるんだからね。緣が深いんだね』時には島田のゐる前で、母親はこんなことをお銀に言つた。さういふ時にはお銀はきまつて涙を流した。

一六

お銀の母親にもまたお銀の唯一の將來の樂しみにしてゐる志摩子にも、長い間に次第にびたりと心が觸れて行くやうになつたことを島田はをりをり繰返した。戀するものゝ間にも細かいことは常にあるものだ。單に愛するとか、戀するとか

いふことだけでなしに、いろいろなことが二人をそこに伴れて行くものである。島田は志摩子の生れた時分のことを今でもはつきりと目の前に見ることが出來た。尠くとも志摩子を持つたといふことがお銀を落附かせた。自分の生んだものではないにしても、自分の長い間の努力の結果を始めてお銀はそこに見出したやうな氣がしたのである。そして女性の誰でもがするやうに、さうした一つの愛を確實につかむことに由つて、その容易に止めることの出來ない男性への憧憬を徐かに自から押へることが出來るやうになつたのである。

『あの時分のことを考へると、とても志摩子はこんなに丈夫にならうとは思はなかつたね』

やうやく震災後、學校から歸つて來るやうになつた志摩子の大きくなつたのを見ると、島田はふとこんなことを言出す氣になつた。

『本當ですね……。茅町の病院に入る時分には、もうとても助からない、今日死

ぬか明日死ぬかと思つたくらゐでしたね。これも皆お父さんのおかげよ』

幼い時から島田を父のやうに呼ばせるべくお銀は志摩子を習慣づけてゐた。

『私、そんなに弱かつた！』

志摩子はさうでなくつてすら大きい眼を更に大きく鈴か何ぞのやうに張つて見せた。

茅町の病院――中庭にひよろ松だの青木だの棕櫚だのが混雜（こたが）と栽ゑてあつて、その綠葉は五月の窓を鬱陶しく塞ぐやうな病院の一室、そこでもかれは苦しい戀の求道者であつたことを思ひ起した。お銀の眼や額や眉が常にかれを苦しめたことを思ひ起した。その指にはめたダイヤが、翡翠の根がけが、百足虫の帶留が、象嵌の櫛が片時もかれの心を落附かせなかつたことを思ひ起した。お銀はその頃はことに美しく、大勢の女達の中に雜ると丸で女王か何ぞのやうに光り輝いてゐたことを思ひ起した。それを自分が持つてゐる、總てではないにしても尠くともそ

の一部は持つてゐる、確實に持つてゐるといふ矜りが、かれを身顫ひさせるほどの喜びと苦しさとに伴れて行つたことを思ひ起した。ことに忘れることの出來なかつたのは、かれがお銀と一緒にそこにその病院の一室に、スヤスヤと床の上に横はつてゐる小さな志摩子を前にしながら、一夜眠らずにそこに竝んで起きてゐたことであつた。それもたしかにかれ等の戀の繪卷のひとつの光景であつたに相違なかつた。かれ等が夜深けてじつと互に眼と眼とを見合はせてゐる中に、今まで曾て一度も感じなかつたやうな、互ひに相ひかれると言つたやうな心持が盛んに起つて來て、しまひには默つて手を握り合つたりなどしたことを思ひ起した。また書の中は女王のやうに光り輝いてゐても、男を破れた草鞋以上に思つてゐないやうに見えてゐても、さうして相對してゐれば、いつの間にか女は男に寄らずにはゐられないものであるといふことをその時ほどはつきりと意識したことはないことを想ひ起した。その病室には小さな海岸の繪がかゝつてゐて、それが青色の布

で蔽つた灯のために、ぼんやりと夜の光線の中に深く沈むやうに見えてゐたことをかれは續いて思ひ起した。

一七

京都の三條の橋詰の小ぢんまりとした旅亭で、そこのお上とお銀と島田と三人で三味線を持ち出して小唄を彈いたり一中節をさらつたりしたことがあつた。何でもそれは六月の末で、朝から梅雨とも思へないやうな強い雨が降り頻つて赤濁りに濁つた鴨川の水が却つて岸の柳の綠を鮮かに繪のやうに見せてゐるやうな日だつた。紺蛇目藍蛇目の傘が頻りに大橋の上を通つて行つてゐた。

お上は年こそ五十近かつたけれども、曾て祇園で名高い妓のひとりであつただけ、何處となく粋で、話すことなどにもそつがなく、三味線を持たせても、昔がそれとなくしのばれるといふやうな巧みさと柔かさとを持つてゐた。

『島田たちはやがて唄にも倦んで三味線を下に置いて、それからいろいろな雑談へと移つて行つたが、何うした拍子か、お銀は笑ひながら、『さう言へば、あの時あなたと來たのが始めてね、京都は……！』と言ひ出した。

お上はすぐそれを受けて、

『まア、さうだつか、縁が深いわけャな……』

『京都にはそれは何遍と數へ切れないほど、來てゐるのですけれど、あの時が始めてだつたと思ふと不思議な氣がしますね。まだ抱へでゐた頃ですから、明石の派手な、よくあんな大きな柄できまりがわるくないと思はれるやうな着物を着て、あなたが背が高くつて不釣合だといけないと言ふので、梅屋の姐さんが心配して、黒塗のぽつくりなんかをはいて、あなたも亦あなたで、好加減好い藝者でも伴れた氣か何かで、平氣で京都の市中を歩きまはしたんですからね。のんきなものでしたね。その時鶴の家のお上が一緒で、澤文か何かに泊つて、一かどえら

いお客か何かのやうな顔をしてゐたぢやありませんか。あなた覺えてゐますか？』

『それは知つてゐるよ』

『あなたつたら、それも平氣で、鶴の家のお上が別間か何かを探してゐるのに、そんなことには頓着しないで、好いよ、好いよ、面倒臭い、三人して此處に寢れば好いぢやないかなんて仰しやつて、ぐんぐんおよつて了つたぢやないの……。あの時分はあなたも無邪氣だつたのね』

『いゝのやな、さういふ頃が……』

『それから、それ、あなた覺えてゐる？　四條の向う側の菱屋に行つて、お土産にするんだと言つて、櫛を買つたりなんかしましたね。覺えてゐる？　何しろ、もう隨分昔のことですから、ね。私が十九の時のことでしたからね』

『まア。そんなに古く……』

驚いたやうにお上も言つた。

『それから、かういふことがあるんですよ、お上さん。その時の歸りよ。四條の涼みかなにかに行つて、そら、江戸ッ子の七つ位の男の子を伴れた職人風の男がその時上方辯の人と喧嘩をしたぢやありませんか。ね、覺えてゐるでせう？　それから、そこであるところに寄つて、鴨川のあの冷めたい水に足をポチャポチャさせたりなんかして、それから歸りに、そら、あそこで、木屋町通りか何かで、お茶を買ひましたよ。もう夜も遲く、戸を閉めて了つたのを賴んで明けて貰つたら、そら、京都では今でも戸が昔の蔀のやうに上にあげるやうになつたところがありますね。その戸をあげて、茶を賣つて呉れましたが、中ではもう小僧達が床を敷いて寢るばかりになつてゐました。そこですよ、そこを出て一間か二間來たと思ふと、いきなり先生にいやッていふほど右の足の親指を踏まれちやつたんですよ、あつーと言つて私は蹲踞んで了ひましたが、あの時の痛さつたら――』

『あ、そんなことがあつたかね』

島田は思ひ出して笑つた。

『あ、それそれ、その時、下駄をあづけたのやな！』お上はお上で、かう言つてあはゝと聲高く笑つたが、それは、下駄を預けるといふことは、上方では（おぼえて居れ！）といふことになるといふことなどをお上はそこに持出した。

一八

『つまり忘れないやうにギウと踏んで置いたわけだね！』

島田も笑はずにはゐられなかつた。

『そや、そや……昔から、こちらではな、さういふ時にはいつもよく下駄を持出すのや……』

『さうかも知れないのね』お銀も笑つて、『でもあの時の痛かつたことと言つたら、それは今でも忘れられないやうな氣がしますからね……。私、しやがんだま

ま暫くは立つことも何にも出來なかつたんですもの……』
『お安くない話やな……。一杯飲みまほか！』
お上は手を拍いた。
『お上さんだつて、若い時はお安くないことが澤山あつたつて言ふぢやありませんか？』
『そや、そや、ほんまに……。薄情になんかされずにな』
『あんなことを言つてゐる。須磨にゐる頃には隨分大事にされたつて言ふ話よ』
『昔のことやな』
『今だつて來るんだよ！』
島田は打つけるやうに言つた。
『あほらしい……。そんな年かいな。もうから白うなつてはあかせんが……。誰かて若い方が好いてな』

『やつぱりあの寺町通に若いお妾さんがゐるんですか？』
『さうやろな……』
『それでも來るには來るんですか……？』
『あほらしい、あんたはんまでそないに言はすか。誰になときいて見なはれ。且那なんか、もう、とうの昔から來やへんがな……』
『でも、姝妬（やきもち）をやいたことがあるだらうな――』
島田が傍から言つた。
『姝妬かな、それや人間やに、少しはやいたこともあるかも知れんが、あゝいふことはいくらやいたかて、きりがあらへん……』
『でも、今でもお上さんのとこにちよくちよく來ますぞな、その若いお妾さんが――』丁度そこに燗のあつくついたのを持つて來た、此家の女中頭のお繁さんが大きい眼を見張るやうにして言つた。

『やつぱり、さうでなくちや治まらないからな……』
『治まるも、治まらんもあらへんが、お上さんと仲が好いのだぞな……』
『やつぱりお上さんがえらいのよ』
お銀がかう傍から言つた。
人間は誰でも皆さうなのだ。さうでなくてはお互に死ぬより他爲方がなくなるのだ。三角關係ならば、何處まで行つても三角關係で通つて行くのだ。それを生中何うの彼うのしようと思つたつて爲方がないのだ。何うにもならないのだ。だから終ひには自分の持つてゐるものさへ完全に持つてゐればそれで好いとして、落附いて、朝夕を送つて行くやうになるのだ。悲しいことだが、何うも仕方がない……。島田はこんなことを考へながらあけた盃をそのまゝお上にさした。
お上はいかにも左が利きさうに鹽梅よくそれを受けて、お銀の酌をするのをこれはすまぬといふやうにしてついで貰つて、二口か三口かに旨さうに器用に飲ん

だが、そこにある盃洗で洗つて、
『今日はたんまりのろけをきかせられたほどに、何か奢つて貰はにゃうまらんなー』
と笑ひながら返して、『こちらがかういふ氣象だから好いのやな』
『ちつとも好いことなんかありやしないのよ、お上さん。たうとうこんなところまで引張つて來られちやつたのよ。ねえ、あなた！　さうですね、私にも一つ頂戴！』かう言つてお銀はいかにも氣持が好ささうに、島田の手から取つた盃に波々と酌をして貰つて、ぐつとそれを一息に飲み干した。
『何うしたの！　馬鹿に見事ぢやないか』
『昔を思ひ出したら、好い氣持になつちやつた』
かう言つてお銀はまたそこにあつた三味線を取上げた。

一九

また一しきり賑やかになつた。――小野の道風ぢやあるまいし、かはずに柳を見てかへる――などいふ昔流行つた小唄がそこに持出された。地歌の一節をお上が爪彈でチャラチャラと鳴らして見せた時には、お銀もさも感心したやうにその相の手を自分でも眞似て見たりして、『地歌は何うしても此方のもんですね……。何とも言はれませんね。お上さん、餘程お習ひになつたんですね……？』

『なんの……ほんのすこしばかり……地歌は辛氣なもんヤで……』

『でもお上手ですね……』

『その代り、都々逸は東のもんやな。京にはなまりがあつて、節が何うもうまう行かんのやな』

ぽつと顔が赤くなつたといふぐらゐの酔ひ方でお上は心持好ささうに莞爾しな

がら盃を島田にさした。

『お前も眞赤だぜ……』

『さう……』

お銀はさう言つたが、それには頓着しないといふやうにして、また三味線を取上げて、今度はその都々逸を彈き出した。

『そら、何とかいふのがありましたね……』一つ二つ彈いてからお銀は島田の方に顔を向けた。

『何とかいふのがあつたな。そら鏡研ぎァわが身見ぬ日は錢も見ぬ……とか何とか？』

『さうさう、そんなのがありましたね。古い都々逸ね。始めは何ッて言ひましたつけね……』ちよつとお銀も考へて見たが、思ひ出せないので、

『それよりも、船は楫といふのがあつたぢやありませんか？』

『あ、あいつか……』島田はやがて小聲で唄ひ出した。

――船は楫、駒は手綱よぬしの機嫌のわるいのもみんなわたァしがおろかゆゑ

――字あまりのところを長く引張るやうにして、島田はやつときれぎれに唄つた。島田は滅多に唄つたことなどはなかつた。

『やつぱり東や！』

節廻しも拙く、三味線にも合はないのを、爲方がなしにお上はこんなことを言つて調子を合はせた。

それでも氣持が好かつたと見えて、島田の知つてゐるだけの小唄や端唄はやがてそれからそれへそこに出て來た。――もしも途中で雨など降らばこひしう思うた涙雨――などといふのも出れば――人に意見をしたわしが今ではわが身がはづかしや思案の他とはこのことか――などといふのも出た。そしてさういふ唄は、これまで皆なお銀の三味線にのみかれが合はせて來たものだつた。さういふ唄の

中にもかれ等の長い間の戀心が細かに微妙に綴られてあるのであつた。

ふとお銀は女中頭のお繁がさつきから二度も三度も欄干のところに出て頻りに何か見てゐるのに氣が附いた。

『何うかしたの？　お繁さん……』

と、お繁は振返つて、

『何アに、何でもありやせんのやけども……。降りが強いもんやで水が出て、お隣さんの生洲が流れるつて、大騒ぎしてゐやはるで――』

で、皆なの注意はそのまゝそつちに引寄せられて、お銀をはじめお上も島田も皆な立つて、その欄干の方へ出て行つた。一日降り頻つた雨は、今だに止みさうにもしないばかりか、さらに一層のすさまじさを加へて、滅多に水をかぶつたことのない細長い草場の綠すら今は全く見えなくなつて、すさまじく巴渦を卷いた濁流が大橋の丸い石の橋杭に小さな瀑を成して轟々と落ちかゝつて行くのだつ

た。下では鰻や鯉の入つてゐる大きな生洲の簪が二つも三つも浮かんで流れ出したらしく、若い衆が二人も三人もあちこちに膝つきり入つてその流れるのを押へることに努力してゐるのがそれと見えた。

『ひどい雨ね……』お銀はこんなことを言つて、島田と並んで立つて夕暮近くあたりのぬれそぼちたさまをじつと眺めた。

二〇

その時ではなかつたけれども、やはりその旅亭にお銀が待つてゐて、島田が遠くからそれに向つて長い旅をしてゐるやうなこともないではなかつた。それは秋だつた。到るところに木の葉が色付いて、山々が碧い空にくつきりと貼すやうに並んで連なつてゐた。かれは國のはてにあるやうな大きな停車場から、今夜着く筈の二音信をお銀にあてて打つて出て來た。今夜はたしかにかの女に逢へる。一

月も逢へずに夢にばかり見て來たかの女に逢へる。かう思ふと、いろいろなことが眼の前に浮かんで來て體がわくわくして、じつとしてゐられないやうな氣がする。爲方なしに、島田は空いてゐる二等車の中を立つて、此方から向うへと歩いて行つた。

海が見える。蒼い蒼い海である。島が二つも三つも並んでゐる。そしてそこにも人が住んでゐると見えて石ころを屋根に載せた家などがそれと見える。さういふ家に住んでゐる人たちにも、島田の今味はつてゐるやうな、靜かな、それでゐてバッショネイトな喜び——さういふ喜びがあるだらうか。それはとてもあるまい。かういふ風にその愛した女を向うに置いて、逢へることは土を槌で打つよりもたしかで、それでかうして汽車の進んで行つてゐる一室に身を托して、飽くまでこれに向つてあくがれて行つてゐるといふことは誰も多くは味ふことが出來ないばかりではなく、かれにしてもこの長い人生の中で、さう度々味へるものである

まい。かれはあらゆることから離れて來たことを思つた。煩さい事務的な仕事からやつと離れて來たことを思つた。もう何も思はなくつても好い。今日一日は何も思はなくつても好い。こんな風に考へて、かれは海の見える方の窓を明けた。海風が爽やかに吹入つて來た。

さうかと言つて、かうしてひとりでゐるから好いのである。女と一緒では面白くない。いや、面白くないことはないが、それではあまりに卽きすぎる。あまりに現實に卽き過ぎて空想を樂しむといふやうな餘地がない。さうかと言つて、女と全く離れてゐるのでも面白くない。淋しすぎる。やつぱりかうして女を前に置いて、汽車がトラツタツタ、トラツタツタとその進行の諧調を刻みながら、時には野、時には海、時には白壁の土藏の連つてゐる村落、また時には道の傍まで小山の裾が落ちて來てゐるといふやうな狹間、また時には濱から生魚を藁包にして土產に女達の持つて歩いて來てゐるやうな田舍道、かと思ふと、小さい停車場が急

にそこにあらはれて來て、しかも急行のために汽車はとまらず、驀地(まつしぐら)にそれを素通りして行つてゐるやうでなければ、細かに戀心があたりの自然と雜り合つたやうな、さうした喜びを味ふことは出來ない。それにしても、曾てはこれと反對にやつぱりこの同じ線路を、逆にかの女がその同じはづれの停車場までかれに逢ひに來たことがあつたではないか。その時にはかれは海からその港の旅舍に來てゐて、一日雨の降り頻るのを見つゝかの女の來るのを待つてゐたが、その時は何うであつたらうか。かれのこの戀心と同じやうな喜びがかの女の全身を動かしてゐたであらうか。さう思ふと、その時夜遲くその停車場にかれが迎へに行つた時の、かの女のそはそはしたさまがそれとはつきりくり返されて見えた。續いて今日にしても、かの女が島田がかの女をその港頭の旅舍に待つたと同じやうに、やつぱりその三條の大橋を前にした旅亭でかれを待つてゐるに相違ないのである。さつき打つた電報を受取つてからそはそはと欄干に凭つたり、桐火桶の前に坐つ

て見たり、そこら近いところに買物に出たりしてゐるのに相違ないのである。さう思ふと、さうしたかの女のさまがそのまゝそこにあらはれて見えるやうな氣がした。

ふと見ると、かれと同じ停車場から乘つて來た、何う見ても色街の人としか見えない二十三四の美しい耳かくしに結つた女が、これもやつぱり誰か待つてゐる人のところに行くらしく、さつきまでは向うむきに、纔にその頭だけ見せてゐたが、急に立上つて退屈さうに此方を見廻したりなどしてゐるのをかれは眼にした。

トラッタッタ、トラッタッタ——汽車は絶えず諧音を立てゝ進行してゐた。

二

島田は、やがてその耳かくしに結つた女と短かい對話を取りかはした。

『何處までお出でになります?』

島田はいきなり訊いた。

『神戸までまゐります……』いくらか唐突だつたので、女はきまりがわるいらしく、いくらかうつむき加減にして答へた。

『それぢやまだ中々ですね……』

『えゝ……』

と言つたが、その時にはもはやその最初の心持を恢復したらしく、誰が見てもさうした社會の人だといふことがわかるやうに、莞爾した顏を此方に向けて、『何うしても、夜の十時近くになりますの……』

『大變ですね』

『しかし、今日はまだ好いのでございます。空いて居りますから……』

『それはさうですね』

『込んだ時なんかですと、身動きが出來ませんから、本當に退屈して了ひますけ

れど』……その言葉の中に島田は少しの土地訛をも見出さなかつたので、
『失禮ですけども、あなたは東京ではございませんか？』
『え、東京にまゐつてゐたこともございます……』
しかもそれ以上には入らせぬやうに、此度は正面に見て、
『失禮ですが、あなたはどちらまで——？』
『京都です』
『では、私よりももつと先きでございますね。京都には、何うしたつて十一時になりますね』
『閉口してゐるのです……』
二人はこのくらゐしか話さなかつた。しかもそれでもこの空いてゐる車室の中では、いくらか退屈をまぎらせることが出來た。如才なくやさしく見せかけてゐながらも容易に深く入らせないやうなところにも、その社會の人としての修練が

積んでゐるといふことを島田に思はせた。
しかしそれだけでも、いくらかでもその長い長い旅を見てゐると、彩色するに足りるやうな氣が島田にはした。その女は食堂に行つたり、そこから歸つて來るとすぐ白い毛布にくるまつて此方に頭だけを見せて眠つて了つたり、また一時間ほどすると起きて、何か話をするならしても好いと言ふやうな狀態(やうす)をしたり、また時には退屈さうにバッグの中から柿の實を取出して、ナイフで皮を剝いて食つたりしてゐたが、しかも何うしてかそれきり二人は言葉を交へるまでには至らなかつた。次第に午後の日影は西の窓からさし込んで、それが線路の具合で延びたり、縮んだり、時にはまた全くその窓の框のところから消えてなくなつたと思ふと、また急に眞中の旅客の通るところ以上に深くさし込んで來て、その女の坐つてゐる顏の半面を明るく照したりなどした。
何うしたはずみか、島田はお銀がこの汽車でかれをひとり訪うて來た時、福岡

の大學の若い醫者のたしか博士だつた人と同室して、その人にいろいろ世話になつたことがあつたことなどを思ひ出してゐた。その時お銀は平氣で、『若い博士なんて無邪氣なもんですね。そら、あのO博士とかいふ若い患者を何うかした人がありましたね。あのことを話してゐましたがね。醫者にはあゝいふことはよくあることださうですよ。婦人科の醫者などにはことにさういふ誘惑が多いさうですよ』などと言つたが、それがその時かなりに強いひとつのシインとなつてかれの眼の前にあらはれて來て困つたことがあつた。それをかれは今思ひ出してゐた。そして此處に、このガランとした二等室に、この耳かくしの若い美しい女と二人きりでゐるといふことも、かれにあることを考へさせずには置かなかつた。その癖、かれの胸はお銀で一杯ではあつたけれども——。

二二

平生ならとても辛抱して乘つてゐられないやうな長い汽車も、お銀を前に豫想してゐるために、さう大して退屈にもならずに、その間の距離が次第に短縮されて行きつゝあるのをかれは見た。姫路に來た時には、もはや其處此處に灯のついてゐるのが覗かれた。

段々心が落附いたやうな、さうかと思ふと何處か底で焦々してゐるやうな、得體のわからぬ狀態になつて行つてゐるのをかれは感じた。おそらくお銀もあの鴨川べりの二階の一間で、立つたりゐたりしてその時間の來るのを待つてゐるに相違なかつた。

神戸に來た時には、時計はもはや十時のところを指してゐた。

耳かくしに結つたその女は、すつかり支度をして、その汽車のとまるのを待つてゐたが、やがて、

『それでは、……』

と言つて輕く挨拶した。

『あ、もう神戸ですね！』

『やつとまゐりました。あなたはまだ一時間――』

『うんざりしますな……』

汽車がとまつて、停車場の灯が大驛らしいかゞやきと混雜とをあたりに見せた時には、その女はバッグ一つを手にしたまゝ、誰か迎へに來てゐる人達でもさがすやうに、あたりに目を配りながらそはそはとして下りて行つて了つた。窓から島田が首を出して見た時には、もはやその姿は群集の中に混つて見えなかつた。

ひとりになつたかれは、再び諧音を立てゝ汽車の動いて行くのを耳にした。灯の先には闇がつゞき闇の中には山のうねうねと連つてゐるさまがそれと微かに隈取りでもしたやうにぼんやりと見えてゐた。かれは何となく疲勞を感じた。かれは窓の玻璃のところにそのあつくほてつた頬を當てた。

大阪からは乘客が大勢入つて來た。いろ〳〵な上方訛と雜音と埃塵とが車室に落ちた。もはやそこに一日巴渦を卷いてゐた靜かな空氣などは殘されてはゐなかつた。肥つた下品な夫婦連が、かれのすぐ前のところに、一夜ぐつすりと寢て行くための毛布をひろげたりなどした。

京都はたうとう近くなつた。山崎も向日町も通過した。否、もうあと纔かで汽車がその大きな停車場に入らうとしてゐる。かれは時計を出して見た。時間は時間表の發着の時刻とぴたりと合つてゐる。ふと何うした加減か信號が出てゐなかつたためか、それとも別に何か理由があつたのか、靜かにゆるゆると汽車はとまりかけて、暫くすると、今度はぴたりと全くそこに留つて了つた。かれは氣が氣でなかつた。窓をあけて外を見た。あたりは眞暗だつた……。しかしそれも三四分で、また靜かに汽車は動き出した。

混雜した停車場の灯の光線の縱横に雜り合つたプラットホームがやがてやつて

來た。かれは一種形容の出來ないやうな躍り勝な心持で汽車を下りてそのまゝそこを出て向うへ行つた。かれは出口の方へと行つた。かれはそこに、群集の大勢混雜してゐる中に、お銀の顏の白くくつきりとあらはれてゐるのを見落さなかつた。お銀は旅亭の女中と一緒に來てゐた。

自動車が一臺そこに待つてゐた。かれ等はそれに乘つてかれを迎へに來てゐたのであつた。やがて島田はその身をその明るい車内に見出した。

『汽車は後れもしなかつたのね』

かれはそこに一日片時も念頭から離さなかつた女の眉と眼とを見た。自動車はやがて灯の明るい賑かな街を輕快に走つて行つた。

『お前、いつ來たの?』

『今朝來たのよ……』

『今夜は遲くつて氣の毒だつたね』

『でもまだ十一時少しすぎたばかしよ』

膝と膝とを感じながら、かれ等はまた互にその眼を見合せた。

二三

『でも、お前はそんなことを考へない方が好いぢやないか……?』

『さうね』

お銀は島田の顏を見て、『何もさういふことを言ふわけでもないんですけれどもね……』

『幸福といふことは何處にあるか知れやしないよ。何不自由なく暮してゐる人でも、その中に入つて見ると、皆それ〴〵不平があるんだからね?』

『それはさうね』

素直にさう言つてお銀はその言はうとしたことを引込めて了つたけれども、そ

れでも、その顔には何處となくさびしい表情が歴々とあらはれて見えた。滿たされぬ心といふではないにしても、やつぱり何かさびしいところがあるやうに思へた。島田にはよくそれがわかつた。

ある時はまたさういふ話などちつともしてゐはしないのに、だしぬけにかの女は言ひ出した。『それはね、私なんか、ちつとも不仕合せなことはないのよ……。私、滿足してゐますの……だつてさう人間は思ふやうになるものぢやないんですもの……。ちやんと奥様になつて他にもそれと立てられてゐても、それでも心は滿たされずに暮してゐる人がいくらもあるんですもの……。ちつともそれは私、何とも思はないわ。でもね、考へると、私といふ人は、小さい時から隨分不仕合だつたんですね。それはね、何にも知つてゐたんぢやないんですから、別にその時は不仕合だとも何とも思つてゐはしませんでしたけれど、さういふものだとばかり思つて、今に、あの姐さんのやうにならう、もう少し大きくなつたら、あゝ

いふ好い模様を買はうなんて、自分が何んなことをしてゐるかといふことなどは少しも知らずに好い氣になつて、平氣でやつてゐたんですからね。それにしてもよく親が十四か十五の娘をさういふところへ出したもんだと思ひますね……』

『だつて、お前が何うしても藝者になるッて、言ふことをきかなかつたんだつていいふぢやないか――』

『それは親達の困つた形をふだん見てゐたからよ……兩親は何ぞと言つては喧嘩ばかりしてゐて、それを見てゐるのがつらかつたんですもの……』お銀の眼からは涙が滲み出して來さうになつた。『だつて、私、粕壁に仕込みの子になつて行つたのは十四よ……あそこの藤屋の姐さんに、どんなに撥で打たれたでせう。たくあんのお香々にお芋や大根の煮たのばかり、あの勝手の隅のところで小さくなつて食べてゐたと思ふと、あれは私だらうか。本當にこのお銀だらうか。何不足なくかうして親子一緒に暮して、妹はまた妹で、あゝして普通の家庭の人よりもも

つとのんびりと暮して、自分の幼馴染の人と、結婚して、まづまづ幸福でゐるんですが、これがあのお銀だらうか、お銀と同じ人だらうか。かう思ふんですの……。それから考へると私といふ人はさういふ風に生れついて來たんですね。さう言つてはなんだけども、私があつたがためにかうしてこゝまでやつて來たんですね。それは先生にもわかつて貰へるわね』

『それはわかるよ』

『だから、不足はないわ。それさへわかつていたゞければ、私がかうして生きて來た效があるんですもの』急にお銀の眼からは涙が霰か何ぞのやうにバラバラと膝の上に落ちた。島田は默つてそれに對した。何う言つて好いかわからなかつた。それは一家の犧牲にのみ生れついて來たやうな過去の生活に對する悲哀もあるが、それ以上に現在の不滿——不滿とは言へないにしてもやつぱり不滿、不仕合せがその涙のエクスタシイの中に細かに織り込まれてゐることを島田は決して

見遁さなかつた。島田はその涙ごとしつかりと抱き緊めてやりたいやうな氣がした。

『まア、好いぢやないか……。もつと幸福にしてやるよ』

『そんなことぢやないんですけどもね……。私、此頃すつかり泣蟲になつちやつた——』

かう言つてお銀はその泣きぬれた眼に笑ひを湛へて見せた。

二四

ある時はまたお銀はこんなことを言つた。

『やつぱり貰つた子は、本當の子とは違ひますね……』

『それは何うしてもね……』

『いくら此方で一生懸命になつて、妹が生んだ子だなんて思はずに、眞面目に育

てゝもやつぱり駄目ね。他の子は何うしたつて他の子ね……』
『何うかしたの？　志摩子が――？』
『何アにさういふ意味ぢやないのよ。あの子も言ふことをきかないにはきかないですけれどもね、それでそんなことを言ふんぢやないんですワ……。やつぱり女は娘の時に、何んな亭主でも持つて、子供を生んで、父母そろつて育てなければうそだと思ふんです……』
『平凡なことを言ふね？』
『あなたにはさうでせうね……。あなたなんか散々さういふことに倦きた方なんでせうから――』
『それはお前がさう言ふのは無理はないよ。しかし家庭を持つて、一家の細君になつて、子供を育てたところで、幸福だの、自由だのがそこにありさうには思へないね。家庭なんか平凡なもんだからな……』

『それはさうでせうね。しかしそれはあなたのいふことね。私には通用しないことよ。たとへば志摩子にしても、あなたが本當のお父さんなら、何んなに幸福だらうと思ひますもの……。志摩子はあれで本當にお父さんだと思つてゐるんですからね。それを思ふと可哀相にもなりますよ。……』
『つまり、お前にしては、かう思ふんだらう……』島田は一歩深く入つて行くやうな調子で、『それだのに、さういふ風に志摩子は、父さん父さんと言つてゐるのに、此方ではそれを鼻の先であしらつてゐるッて言ふんだらう。ちつとも父親らしい情愛なんかありやしないッて言ふんだらう？』
『あなたのやうに、さうきつぱりと言つて了ふやうなものでもないでせうけども、それに似たところもありませうね』
『何うも爲方がないな……。本當の子ぢやないんだから……』
『だから私もそれで言つてゐるのよ』お銀は種々なことが雑然とその胸に漲つて

押寄せて來るのを何う統一したら好いかわからないといふやうに、『何うして子供は出來なかつたんでせうね。あなただつて、子供は澤山あるんですのに――』

『……』

島田は默つて了つた。いつもなら『かうして遊ぶやうになつてから、子供が出來なくなつたんだね』とか『病氣をしたからね』とか何とか言ふのであつたけれども、その時はさうした輕い氣分になれなかつた。お銀にしてもいつものやうに『あなたにさへ子供があれば、さうすれば好いんだけれど……』とか『さうすれば私だつて、こんなにさびしくはないんだらうと思ふけれど……』とか言ふやうな餘地をも持つてゐなかつた。島田は遊ぶといふ單なる心持が、押詰めれば押詰めるほど次第にさういふところに入つて行つたことを思はずにはゐられなかつた。

『やつぱりさういふことなんだね……もう少しあそび氣分で人間はゐられないも

のなのかね』

『男はさうね』

『女だつてさういふ女はいくらもあるよ。子供なんか放つたらかして、藝者をしてゐる人がいくらもあるぢやないか？』

『さういふ人は別よ。さういふ人はまだ何にも知らないんですもの、爲方がないわ』

『何にも知らない方が好いのかも知れないな！』

二五

『私は違ふわ』

お銀は眞面目で言つた。

島田はまた默つた。さうしたことは、お銀の言ふことにも眞理はあるけれども

それを抽象的にひとつの考へ方にして了ふのは何うかと思つた。さういふ風な考へ方にお銀を伴れて行つた徑路はそれは面白い。それは非常に意味がある。しかし女の型を母婦と娼婦といふやうにわけて、それを全然違ふものにして了ふのは何うかと思つた。しかしそんなことはとても口では說明出來ないことだつた。

『だから、かういふことになつたのね。私の方は眞面目になる……と、あなたの方は反對に、さういふ女は面白くないといふことになるのね』

『さうでもないよ』

『でも、男の方は何うしたつて女が玩弄物でなくつては面白くないやうなところがあるんですね』

『さうかも知れないな』

『だからあの社會なんかが面白いんでせう。私、今、それがよくわかるわ。眞面目では、男の方が面白くないのよ。女の方に別に男があつたり、男の方に別に女

があつたりするのが面白いのよ。男は女にやきもちをやかせるのが得意なのよ……。さうでせう？』

『しかしそれは表面だよ。いざとなればさうぢやないよ』

『さうでせうかね』お銀は考へて、

『さうね、あなたなんかはさうでない方ね。それは私にもわかるわ』

『要するに、あゝいふ人達は、稼業にしてはいけないものを稼業にしてゐるやうなものサ。生身のものを品物か何かのやうにお金で賣買するやうなこころにひとり手にさうした不自然なところが出て來るんだよ』

しかしお銀にはよく飲み込めたか、何うかわからなかつた。お銀もそのまゝ默つて了つた。

言つても言つても盡きないやうなものだつた。また、いくら種々なことを考へて見たところで、そこから新しい光が別にさして來ようとは思へなかつた。しか

し、さういふ風にわかり切つてゐても、それでも、お銀を見ずにはゐられなかつた。十日と逢はずにはゐられなかつた。眉でも、額でも、髪でも、眼でも、言はば、飽きるほど見たものではあるけれども、またそれを空に浮かべようとすればいつでもそこにはつきりとあらはれて來るものであるけれども、しかし不思議にもそのすべてがその新しさを失はないばかりか、いつでもそこにかれを引寄せて行くだけの魅力を十分に持つてゐた。

それが卽ち戀愛だからだ。戀愛だからいつまで經つてもさめないのだ。ところがひよつとするとそれがさめる。理由なしに醒めることがある。一日もそれがなくては生きてゐられなかつた肌も、眼も、髪も、眉も、ひよつとした具合で、ちつとも心を惹かなくなることがある。そこに戀愛の不思議がある。この醒めるといふことゝいつまでも醒めずにゐるといふこととは何處から來るのだらうか。やつぱり互ひの心のリズムの調子から起つて來るのだらうか。それともお互ひに體が

刺戟を感じてゐると、感じてゐなくなるとから起つて來るのだらうか。氣が附くと、かれは身を横にしながら、取り留めもなくこんなことを考へてゐるのであつた。塀のすぐ向うは、坊主の學校の食堂になつてゐて、晝になると、いつもきまつて破鐘のやうな銅鑼の音があたりに際立つて響きわたつた。夜はおそくまで大勢そこに集つて、說法の稽古をしたり、ピンポンをやつたりした。十時に就床の銅鑼がけたゝましく鳴つた。

二六

その二階屋が再びかれ等の巢になつて行つた。島田はその草場に寒い雨がしとしとと降りしきるのを見た。またその通りが足駄でなければとても歩けないやうな泥濘(どろんこ)になつてゐるのを見た。また時には西風が烈しく埃を吹き立てゝ、それに向つて歩いて行くのに殆んど眼も明けられないやうなこともあつた。かれはその

坊主の學校の塀についていつもその細い通りを向うへ行つた。

かれは成るたけ他の眼に觸れないやうに、やうにと心懸けた。それは別に何でもないことでもあるけれども、それでもさうして戀の闇に通つて行く身のさまを他に見られるといふことはあまり好い心持をかれに誘はなつた。それに前の下谷の藝者の許に通つて來る自動車の旦那のこともあつた。自分だとてそれといくらも違つてはゐない。評判されないとは限らない。隣近所から何の彼と噂されぬとは限らない。それを恐れたかれは成るたけそつとあたりに際立ぬやうにしてその通りへと入つて行つた。かれ等は川に添つた二階屋のやうに決して自由には振舞はなかつた。それでも三味線が一挺もなくてはと言つて、ある時、出物があつたのを廉く買つて來て、それを黄ろい安壁にかけては置いた。しかも滅多にそれをおろして彈いて見たこともなかつた。

『昔なら、からさだの、桑だの、あんなにいゝ三味線ばかりあつたのにねえ！』

お銀は壁にかけられてあるその安三味線を見てはいつもこんなことを言つた。

『本當だねえ』

『あの桑なんか好い三味線でしたねえ！』

と、傍から母親は、『それは三味線も三味線だけれども、それを言ひ出して來た日には、際限がないよ……。それよりもね、お前の着物の皆やけたのが可哀相だよ。帶だつて何十本ッてあつたのにねえ……』

『もう母さん、言ふのはおよしよ』

お銀は手でとめるやうにした。

『だつてさ……』

『でも、私、着物や帶のことは何とも思つてゐないんですもの……。だつてもう散々着たんですから……。それよりも先生にいたゞいた懸物を何故ださなかつたと思ふわ。文晁だの草雲だのッて好いものがあつたんですからね』

『さうだな、草雲は惜しかつたな……』

その竹の幅がいつでもその二階にかけてあつたことを島田は思ひ出した。

『いくらでも出さうと思へば出せたんですからね……。三時間も四時間も土手にゐたんですもの……』

『でもかけ物を出すなら、着物や帶つて言ふことになりますからねぇ……。やつぱりあの時はさういふ氣にはなれなかつた』母親もその當時を思ひ出さずにはゐられないといふやうにして言つた。

『それはさうね』

お銀も感慨無量と言はぬばかりにして言葉を合せた。

それでもその安三味線でも、昔を偲ぶに足りるといふやうにしてお銀は二三度彈いて見せた。『これでも値段にしてはちよつと彈けますよ』などと言つて、紙を裂いて絃に挾んで、調子をつけて、爪彈きで、『さア、何う……。あきの七草、蟲の

音に、のこる螢が身を焦す……。さア、何うしたの……忘れたの……』

『もう、さういふ氣にはなれないね』

『そんなこと言はずに……さアひとつ、昔のつもりで……。よござんすかい。二上りですよ……。三日月の光出ぬ間にちよとかけ出し、戀がならひか、人目が邪魔か、曲る横町に柳影……。本當に何うしたんですの？　やらないの……』三味線を下に置いて、『でもよくこれを唄ひましたね、そら、あの二階で、あなたつたら醉つぱらつて、俺が踊るんだなんて言つて？　あの時分は元氣でしたねぇ』

『さうだつけな』

お銀はしかもやめもせずに、かれの知つてゐる小唄をそのまゝその安三味線で頻りに彈いた。

二七

何うかすると、島田がお銀の襟がけになつてせつせと洗濯板に着物や襦袢や夜着の敷布などを當ててゐるところに出會した。

『見て下さい……。ホラこんな手！』こんなことを言つてかの女はその荒れた手をそこに出した。

『僕の責任かね。それも……？』

『あ、すぐあゝいふ風に取る！』

眞顔で島田を見て、『さういふつもりで言つたんぢやないのよ。こんな洗濯までするやうになつたことを褒めていたゞきたかつたのよ。ホラ御覽なさい、こんなになつちやつた！』

『そんなに洗濯なんかしなくつたつて好いぢやないか。一體、お前やり出すとむきになるたちだね』

『でも私の性分で、さうは出來ないのね……。汚れたものを片隅に束ねて置くこ

とがいやなのね』

『癖性だからな』

『でも、私、洗濯なんかちつともいやだなんて思つてゐやしないのよ。やつと私も女のすることが出來るやうな身になつたと思つて喜んでゐるのよ。手ぐらゐ汚なくなつたつて構やしない……』から言ひながら、お銀はじつとその手を裏返して見てゐた。

『やつぱり惜しいね』

『さうね、惜しくないこともないわね……。たまには昔のことなんか考へ出して見ることもなくはないわ』

『たうとう本音が出たね』

『やつぱりあゝいふ中にゐたものは、あそこで一生を送る方が好いのかしらなんて思ふこともあるにはあるわ。さうかッて言つて、あとの殘つた人達を羨しいな

んて思つたことは一度だつてありやしませんけれどもね……』急に思ひ出したやうに、『さう言へばお向うでは、昨日立つて行つたわ』

『あ、さうかね……。たうとう名古屋へ歸つたかえ？』

『お氣の毒だつたわ。總領の娘は旦那さんが船乘だから一緒に上海へ行きましたし、奥さんは小さい子供達を伴れて、私達も田舍に引込んだら、もう東京へは滅多には出て來られませんねなどと言つて、さびしさうに家を疊んで行きましたよ。私、東京驛まで送つて行つてあげた……』

『お妾さんは何うしたね』

『よくは知りませんけどもね。東京驛へも送つて來てはゐませんでしたし、そのまゝ突放して了つたらしいわ』

『何うしてさうだらうな』

『私、可哀相な氣がして爲方がなかつたわ。今から二十年も前に、さうして名古

屋から出て來て、夫婦共稼ぎ見たいなことをして、やつとそれだけの身代になつたのにあの震災のために、めちやめちやになつて了つて、あゝして名古屋へ歸つて行つたと思ふと、他事（ひとごと）ではないやうな氣がしましたの……。世の中は誰でも一度はさういふ目に逢ふのねえ。私なんか、さういふ時にはきつと慘めだと思ふわ……』

『大丈夫だよ』

『あなたの大丈夫もあてにならない！』

その時の別れの涙を思ひ出したといふやうにしてお銀は默つた。心棒があれば、何の彼のと言つても、それでも先づ先づ治まつて行くのに、それがなくなつては、心棒がなくなつては、誰も彼も皆なてんでんばらばらにならなければならない。奥さんもかうして歸らなければならない。お妾さんも成るやうにしきやならない道を歩いて行かなければならない。子供達だ

つて父親がなくて可哀相だ……。さう思つたらたまらなくなつて涙が出て來て爲方がなかつたことをお銀は繰返した。

『奥さんにしたつて、さうして田舍に歸るよりも、いくら嫉妬がやけても、腹が立つても、旦那が達者でゐる方が好いにきまつてゐるんですからね……』お銀は自分のことでもあるやうに話した。

二八

お銀はもとゐた土地の方へとよく出懸けた。着物なども漸く出來て、震災の燒け出されと言つたやうな慘めさはもうなかつた。細い巷路を通ると、『まア、桐屋の姐さん！』などと若い妓からさもなつかしさうに聲を懸けられた。

堺屋のおそでが養母を伴れて、遠い田舍に嫁いで行く日はやがて近寄つて行つた。お銀はそれまでにも二度も三度もおそでに逢つてはゐたが、その日は――い

よいよ明後日は東京を引上げるといふので、賣拂ふ道具だの薦包だので家中が一杯になつてゐたので、それでさういふ風にことに押詰めて悲しかつたのかも知れなかつたが、兎に角涙が出て爲方がなかつた。おそでも養母も眼の縁を赤くしてゐた。

お銀はそこを出て懇意な待合に行つて、一時間ほど話して、今度はやはり同じ藝者屋の笹本といふのへ寄つた。そこにはかの女より一時代あとの、美しいやさしい、舞踊の旨いかの子といふのがゐて、平生何ぞと謂つては世話になつてゐたので、『まア、姐さん！』と言つて莞爾しながら喜ばしさうに迎へた。

『まだお座敷ぢやないの？』

『不景氣よ、姐さんこの頃……』

かの子は、から言つて長火鉢の方へお銀を誘つた。そこには此處の老主婦もゐた。

何處に行つてもその堺屋のおそでの話ばかりだつた。かの子はおそでの旦那の友達に當る人に出てゐて、世間よりはより深くその内情を知つてゐて、その旦那が今度の震災ですつかり駄目になつた話などをした。『それでも旦那は何んなになつても、たとへ乞食になつても、お前だけは世話はすると言つたのよ。旦那だつて離れたくはないんですからね。ところが、おそで姐さんは、もうつくづくかういふ稼業は厭になつた。どんな貧乏でも好いからッて言つたんですつて……。それでゐて今ではいくらかは後悔もしてゐるんですつて……。今になつてはさうも言へないんでせうけれどもね……』かうかの子は一かど深い事情を知つてゐるやうにして話した。しかしさういふことよりも、皆なが年を取つて、昔のやうにのんきに見番の札數の多いのを誇つたり見得にしたりする時代でなくなつて、てんでに身を固めたり土地にゐなくなつたりするのがお銀の胸を詰らせるやうにした。かの子のやうな若い妓だつてさうなるのはわけはなかつた。目ばたきする間

にしかすぎなかつた。お銀はそれからそれへと話した。

『姐さん知つてゝ？』

だしぬけにかの子は言つた。

『何？……』

『春の家の旦那の死んだことを……』

『死んだ？……』

お銀は思はず高い聲を出した。

春の家といへば、吉原出で、そのお上さんが辣腕家で、亭主と相談づくで、田舍の大盡などをだまして、いざといふ時にそこに亭主が顔を出したりして脅迫がましく金をゆすつて、それで今の地盤を拵へたつて誰でも知つてゐるのであるが、その亭主が、つい二三日前下谷で首を吊つて死んで了つたといふのであつた。

『それがお前さん、なんにも死ななけりやならないことなんて少しもなかつたの

よ……。あそこなんか、下谷に行つてからもうんと殘して、金なんかいくらだつてあつたのだからね……。やつぱりさうなる成行なんだよ。何の事もなしに、前の晩なんか皆でのんきに話してゐたつて言ふからね。それがさお前さん、朝見ると二階の階梯(はしご)の下り口のところでやつてゐたんだとサ……。あそこにおかねといふ親類の娘か何かがゐたァね。お前さんも知つてゐるだらう。その子が、何かをかしなものがぶら下つてゐると思つて行つて見ると、あの春の家だつたんだつて……』お銀の母親とも友達なので、そこの藝者屋の老主婦は、こんな風に飾り氣のない調子で話した。お銀はその春の家の爺をよく知つてゐて、曾ては廉い抱妓などを世話して貰つたこともあつただけそれだけ、『まア、さうなの……』と言つて目を睜つた。

二九

その春の家にはお銀はよく出かけて行つたものだつた。それは島田を一方に持ちながら一方に執念深く卽いて來る男があつて、それにも金を多くつかはせたり何かしたので、理由なしに離れて來ることが出來ない狀態になつてゐたため、わざとやけに遊び人などと關係して、四方八方行塞りのやうな位置に身を置いた時だつた。お銀はそれを參考にするといふわけでもなかつたけれども、その爺とお上との話を聞きに、またさうした深い複雜した色の道の話を聞きによくそこに出かけて行つたものだつた。『そんなのんきなことを言つてゐては赤い布でもつけた小娘のやうだな……。私なんか御覽なさい！』とかう言つては、その春の家の爺はその經て來た色の道の話をした。爺の言ふところでは、かれは平氣でつゝもたせをやつたといふのであつた。お上がまだ藝者をしてゐる時分、自分が箱屋になつて、半ばそれを監督しつゝ、寒いのにお上が二階の客の床から下りて來るのを待つて待つて待ち盡したことなどもあつたといふのであつた。さういふ時には業が

煮えて業が煮えて、今にも二階に踏込んでやらうかと何遍も何遍も立上りかけては、また思ひ返してやつとそれを怺へて待つてゐたが、とてもそれは芝居などでやるやうなのんきなものではない、やつとお上が下りて來て戸外へ出るや、いきなり横面を張飛ばしたい位の怒りに燃えるのが常であるが、然し惚れた身の悲しさ、まアやつと自分のものになつたといふだけで滿足して、そのまゝ默つて來なければならないつらさ！　その話を聽いてゐると、芝居で見る上方の惡の型その儘で、時にはお銀はじつとその爺を見詰めずにはゐられない位であつた。その癖一方のお上はと見ると、その時分三十八九の好い女で、酸いも甘いもかみわけて、それでゐて、何にも知らないやうに蟲も殺さないやうに、爺の話を肯定するでもなくせぬでもなく、靜かに笑つて聞いてゐるのだつた。その時分には、お銀もさうした巴渦の中にゐた爲か、その話の事實だけはわかつても、さうして生きて行つてゐる二人の心持といふものが本當にわからなかつたが、今ではそれが、さうし

た心の生活が變態的であるために、また共食狀態であるために、そのために普通では想像出來ないやうな心と體との白熱的狀態を呈するのであるといふことが飲込めて來てゐた。今ではお銀にもその心の境の張詰めた狀態をはつきりとその目の前に描き出すことが出來た。虐げた上にのみ味はれる快感といふこと、普通では容易に得られない男の喜びといふこと、その二つの中に挾まれた心の緊張した形、熱情の鞭か何かでひやりと打たれでもしたやうな體の刺戟——成ほどあの人達の心持はそれをやつてゐるのだ、その白熱した心持の强い感じを忘れることが出來ないのでそれを續けてゐるのだ。かういふ風にお銀はそれをその後自分の身に引くらべて考へたが、しかもその時分には、たゞその爺の話が面白く、いくらかでもその身の參考になるといふわけで、それでよくそれを聞きにそこに出かけて行つたのであつた。お銀はそこで種々なことを覺えた。花を引くことの面白く忘れ難いのも、男の心を引張る手管の面白いのも、色の道に入つては好いもわる

いもないといふことも何も彼もそこで覺えた。その癖、お銀はその身のそこに墮ちて深くはまつて行くことを絶えず恐れた。このお爺やお上の言つたことを本當にしてゐてはそれこそこの身の破滅だと思つて何遍そこから引返して來たか知れなかつた。時には爺とお上とがたまらなく恐ろしく思はれたことなどもあつた。

三〇

『それで、お上さんは？』

お銀は訊いた。

『お上さんは平氣ださうだよ。そんなに悲しさうにもしてゐなかつたつていふ話だよ』笹本の老主婦はかう言つてちよつと間を置いて、『あそこの家なんかお金はあるんだし、何も困ることなんかちつともありやしないんだからね……。それアね、震災で悲觀して、もうとても駄目なんて言つてゐたにはゐたさうだけれども

ね……』

『本當ねえ！』

『やつぱり、そればかりぢやない、いろんなことがあるんだらうッて言つてゐたよ。隨分ひどいことをした人だからねえ！　よく言ふものなんかひとりだつてありやしないよ』

『でも氣の毒ね』

かう言つたお銀には、單純にわる口など言つて了ふことは出來ないやうな氣がした。怖い人だとか上方の惡の型だとか思ふには思つても、やつぱりその身にも何處か共通なところがあつて、それが單に他事であるといふやうには思へなかつた。かの女にしても一日張詰めて蒼い顏をしてわくわく震へてゐたことがあつたことなどを思ひ起した。それにしてもお上さんは何んな氣がしたらう？　わざとさういふ風に世間を粧つてゐたのではあるまいか。それとも實際に平氣だつたの

か。もしさうだつたとすれば、それこそ本當に惡人だ……。こんなことをお銀は思はずにはゐられなかつた。

その日はその他にも種々なことを聞いた。かの女の隣にゐた榮といふ藝者が何うにも彼うにもならなくなつて、この先の新道で髮結ひをしてゐることだの、ある待合のお上が旦那に捨てられて氣が變になつたことだのを耳にした。奥の大きな料理屋でも、お上さんはいつもの通り元氣ではあつたけれども、客種がわるくなつた上に祝儀をぐつと下げても、それでもお客が少いと言つて愚痴をこぼしてゐた。平生愚痴などこぼす人でないだけ、それだけ困つてゐるのが知れた。

それは島田ばかりではない、お銀にとつても、あたりの荒涼とした光景と急劇に移り變つて行つた人々の生活とは、昔の舞臺の址といふ心持を起させるに十分だつた。かの女はそこにもこゝにも自分のあとを見出した。その一時あつくなつた相手が神樂坂の藝者を引張つて來たので、それと大喧嘩をしたことがあつたこ

とを思ひ起した。また執念深くつき纏つてゐた男が毒藥などを飲みさうにしたので、慌てゝそれを奪ひ取つたことがあつたことを繰返した。かの女の通つて來たことは到るところにある。いろいろな思ひを抱いてあせつたり、悶えたりしたあとがある。それは島田は始めから一風變つてゐて、熱心になりさうで熱心にならず、さうかと言つて他の客のやうにきつぱりとかの女を思ひ切つてしまふのでもなく、ぢみな中にも何處か强いところがあつて、この人なら大抵な話を打明けて話しても、自分で取亂して執念くつき纏つて來るやうなことはあるまいと信じてゐたが、それがいつか、かの女を引張つてそつちへ伴れて行く動機となつたことなどを繰返した。かの女は奥の料理屋からいつも車を並べて、その土手の曲り角のところまで來て、『それでは御機嫌よう！』と後から聲をかけて土手の下の方へと別れて行くのが例だつた。(あの頃はのんきだつた。先のことなどちよつとも考へてゐはしなかつた……。それなのにいつの間にか、もうこんな先の方まで來

た）こんなことを考へながら、かの女は急いで家の方へと戻つて來た。と丁度よくそこに島田が來てゐたので、『まア、來てゐて下すつたのね？　道理で氣が急けてしやうがなかつた。蟲が知らせたのね……』から云つて嬉しさうにして、それからその土地の話をそこに持出した。

三一

天氣の日には、いつも襷がけのお銀の姿がその二階の物干の上に見られた。

繕はない身なりで、時には筒袖をその上にはをつたりなどして、ちよつと見ただけでは、それがその土地でも指折の美しい方であつたなどとはゆめにも思はれなかつたけれども、それでも髪だけは大抵崩さずに二日おき三日おきに結つてゐるので、艶めかしい色彩が何處となく爭はれずにその丸髷から襟のあたりに漂よつてゐて、隣近所でもそれを問題にしてゐるらしいのが、平氣でそこで物を干し

てゐるかの女にもわかつた。

敷布、繻袢、父親のシャツ、志摩子の下ばきなどが、いつも一まとめに新しいバケツに入れて持つて來られて、それが一つ一つそこに並べてかけてある物干竿へとひろげられて行つた。その頃には、午前十時過ぎの日影が麗かにあたりにさして、靜かなその朝の空氣の中に、その形の好い櫛の齒の透つた丸髷がくつきりと浮び出すやうに見えてゐた。何うかすると隣の細君が向うから聲をかけた。

『よく早くからお洗濯が出來ますことねえ？』

『いゝえ……ダメなんですけれども……子供がすぐ汚して了ふもんですから、靴下だと三日と綺麗にしてゐないんですからねえ！』

『本當でございますよ』

此頃では隣の細君にも、お銀の何者であるかがかなりはつきりとわかるらしく、始めはさうとは思はなかつたので、一緒になつて前の下谷の藝者のことなどを噂

の種にしたものだつたが、此頃ではお互ひにそのことについてはあまり口を交へないやうになつた。お銀の方でも成るたけ内輪に口をきくやうにした。

用をすまして下に下りて來たお銀は言つた。

『あきれて了ふ……坊主の書生なんて、隨分すれてゐるわね』

『何うしたの？……』

母親はそつちを見た。

『だつて、無遠慮なもんよ。私が干物してゐると、それそれ！　好い女が出てゐる！　あれも藝者だとさ！　と言つてゐるのがきこえるぢやないの』

『何とでも言はせておおきよ』

『それは構はないけども、わざわざ顔を窓の外に出して言はなくつたつて好いぢやないの……。御叮嚀に顔を長くつき出して、下から上をのぞくやうにして言つてゐるんだもの……』

『さういふのが住職になつても、身が持てないで、寺の寶物や何かを賣つて了ふやつだよ』

『あきれちやつた！』お銀は勝手に蹲踞んで、洗濯のすんだあとの盥だのバケツだのを片附けて、水の少くなつた大きな方のバケツにモウタアのねぢを捻つてヂヤアヂヤア水を出して、それの一杯にたまるのを待つて、それからあたりを掃除して、まアこれでひと片附かたづいたといふやうにして長火鉢の方へやつて來て、ワセリンの小さな罐を取り出して、やつぱり荒れるのが氣になるといふやうに頻りにそれを手にすり込んだりした。

父親は父親で、段々震災のほとぼりがさめて行くにつれて、やつぱりさういふものもなくてはならないといふやうに――さういふものもこの退屈な生活をまぎらせるための一つの實用品だと言はぬばかりに、金魚の五六疋入つてゐる玻璃張りの四角の箱だの、毒々しいほど赤い草花の廉い鉢などを買つて來て、それをそ

の自分の坐つてゐるガラス窓の下のところへと並べて置いた。と、お銀は、『貧弱な金魚ね……。でも、でもこれでもないよりは好いかね』などと言つてそこに坐つた。

三二

志摩子はその金魚がゆつたりと尾を振つてゐるすぐ下のところに小さな机を据ゑて、そこで書き方をしたり、圖畫を描いたりお伽話を讀んだりした。習字も圖畫も兩方ともうまかつた。お銀は島田が行くと、『それ、志摩子、此間の習字を出してお父さんにお見せな……』などと言つてそれをそこにひろげさせた。手のたちはわるい方ではなかつた。『うん、これはよく書けた。これよりも此方の方が好い』などと島田はその一枚を右の手で持つて遠く離して見たりなどした。

畫洋紙の中にもいろいろなものがあらはれてゐた。塀のところに桐の木の立つ

てゐるもの、學校の庭の一部、ブランコに日の當つてゐるところ、紐のついた少女の帽子、藻の中に泳いでゐる金魚などが青い赤い黄い色鉛筆で滅茶滅茶に塗られた。それでも子供の眼といふものは割合に敏感だと見えて帽子の影などに何處か細かい氣分があらはれてゐたりなどした。と、島田は『う、うまい、うまい……この子は中々繪が書けるね……。うん、これは捨てたものぢやない……』こんなことを言つて、それをわざわざ壁にピンで留めさせて眺めた。

下谷の藝者がそこにゐる中は、それに蔽はれてそれで人目を惹くやうなことはなかつたが、それが餘りに近所の評判になつて、坊主の學校ではそのため退校處分を命ぜられたものが出來て來たりしたので、煩さくなつて、たうとうそこから移轉して行つて了つてからは、あたりは火の消えたやうに靜かになつて、それは好かつたが、そのため今度は却つてお銀の生活があたりの人達の好奇心を惹くやうになつて行つた。何と言つても色街に生ひ立つたものは普通の人達の生活には

雑りにくかつた。わるくくすぶつてゐたにしても、着物などさう派手なものを着ないでゐたにしても、それでも何處か垢ぬけのしたところがあつて、普通の人でないといふことは誰が見ても一目で知れた。お銀にはそれが得意であるやうでもあり、またさういふ風に容易に世間に雑り合へないのが不愉快なやうでもありして、わるく近所の人達に反感を持つたやうな態度に出ることも尠くなかつた。

かの女はいつも母親と一緒に近所の風呂に出懸けた。午後であつたり、また夜であつたりしたが、それが夜目にもくつきりと白く美しく見えて、すれ違つた人達は、誰でもおや！ と言はぬばかりにして振返つた。『何しろ、それより他に用がないんですからね、綺麗になるわけですよ』あたりの細君達は寄ると觸るとこんな噂をした。

従つて島田にしてもその噂に上らないわけには行かなかつた。『あ、あの人よ、あそこに始終來るのよ』二三人の細君達は、垣の角のところに立つて、さもめづ

らしさうに此方に入つて來る島田を指した。島田は到るところでさうした細君達のめづらしさうな目を感じた。それに家主の爺が、中々のやり手で、震災前まではかなりの財産を持つてゐたのだが――此處に來るにしてもお銀がその爺を知つてゐて、それで強ひて頼んでその家を貸して貰つたのだが、その家主が此頃何處からか若い妾を伴れて來てそれと同棲生活を始めてゐるので、一層さうした形があたりの人達の好奇心を惹くやうになつた。春はもうとうに櫻や柳に來てゐた。路傍の草場の花も丸で繪具でもこぼしたやうに青々としてゐた。お銀は島田と並んで歩きながら、『もう花もすつかり咲いたわね……』などゝ言つた。何うかすると志摩子もその傍について來た。

三三

何うかすると島田はお銀の身の周圍についてじつとそれを見詰めるといふやう

な心の態度になつた。それは嫉妬といふのでもない。また疑惑と言つたやうなものでもない。むしろさういふはつきりとしたものからは餘程距離を置いたものではあるけれども、それでもじつと見詰めたやうな心持になつた。入つて行つても入つて行つてもその中がわからない。夫婦ならば、始終一緒にゐることではあり、妻のすることを夫は日常詳しく見て知つてゐるので、大抵の細かいことはその眼を遁れることはないのであるが——否、さういふ風に何も彼もあまり細かに知つて了ふので、それで夫婦は飽きたりなどするのであらうが、その方から言へば、さういふ風にそのすべてを知りつくさないといふところに却つて、島田とお銀との現在の愛着がつながつて懸つてゐるのだが、島田にはそれはよく飲み込めてゐるのであるが、しかもすべてを知らずには何うしても滿足してゐられないやうな細かい氣分がをり〳〵かれの心を取卷くのであつた。男女のことは結局一夫一妻だ。そこまで行かなければ何うにもならないのだ。必ずそこに到達しなけれ

ばならないのだ。島田はそれをつくづく痛感してはゐるが、しかもまたその一方では、そこまで行けば心と心とが平均しすぎ、身體と身體とが平均しすぎて何でもなくなつて了ふのだ。平凡になつて了ふのだ。つまらなくなつて了ふのだ。もうそこには戀愛の女神は住んでゐないのだ。戀愛といふ女神はもうこれで役目がすんだから私のゐるところではないと言つてサッサと逃げ出して行つて了ふのだ。さういふことをもかれはよく知つてゐるので、敢へてさうした境までその心を進めようとはしてゐないのであるけれども、否その反對にさういふ風にすべてを知り得ないところにその愛着があるのだと思つてはゐるけれども、それでも自分が影のやうなものか何かに身を變じて、お銀の行動の一伍一什を細かによそから見てゐることが出來たら、何んなに滿足だらうと島田はをりをり思ふのであつた。かれは長い年月を費し、自分の出來るすべての力をそれに用ゐ、これ以上に自分の眞心を彼女の前に披くことは出來ないと思はれるほどに全心的に愛してゐても、

それでも猶ほその境まで到達することの出來ないことを、悲しむといふよりはむしろ不思議にせずにはゐられなかつたのである。しかし島田はいつもそれを自分で押へた。さういふ風に考へるからいけないのである。さういふ疑惑の影のやうなものを起すから、それでさうした心持が芽を出して來るのである。信ずればそれで好いのである。かういふ風に考へてかれはいつもそれを壓迫して來た。しかしそれでもその疑惑の鳥の影のやうなものは、何處からともなく、いつもその翼をあたりにひろげた。と、お銀は、

『あなたまだそんなことを考へてゐるんですか?』

と言つて島田を非難するやうにした。女にも男の心の底はわからなかつた。從つてさういふ風に考へられることは、お銀に取つて得意さに似たいくらかの快感は誘ふが、決して愉快なことではなかつた。『では、さういふことにしませうかね? 先生ももう私を飽きたんでせうから』かういふ風に輕くそれを受け流すこ

ともあるが、時にはまた、『何うしてそんなことをおつしやるの! ちよつと考へて見たつてわかるぢやありませんか……いやですよ、もう、そんなこと。そんなに言ふなら毎日來ていらつしやいな!』かう突放すやうにして言つた。

三四

さういふ時に際していつも起つて來る考へは、自分の家庭を改造すれば好いといふことである。しかもさうした勇氣がないために、ぐづぐづと燃えもせず消えもせずかうして長く不得要領に續いて來てゐるのである。それに、幸か不幸か、かれはその家庭といふものに重きを置いてゐなかつた。家庭を改造してそしてその得るところは別に大したものでないことをかれはよく知つてゐた。家庭といふものがいかに女を平凡化するものであるか、また外で見てゐて美しかつたものがそこに伴れて行つて何んなにつまらないものになつて了ふか。また自分ですつか

り所有して了つたといふことが何んなにそのものを無意味にして了ふかといふことについてかれはよく知つてゐる。そこに人間の窄見たいなものがあつた。何うにもならないものがある。從つて多分の疑惑は存してゐても何處かにまだ所有し切れないやうなものが殘つてゐても、更に言ひ換へて、他人の中に全くその美が暴露されてあつたにしても、兎に角そこに戀愛を感じてゐられる方が家庭に入つて戀愛がすつかり失はれて了ふよりはまだしも增しであるとかれは思つてゐた。勿論、これまでにもさういふセオリイにはかれは何遍出會したか知れなかつた。また何遍それをさういふ不得要領な考へ方で押へたか知れなかつた。さういふ時にはかれはいつもかう思ふのである。何もさうきつぱりとしなくつても好いではないか。若い時か何ぞのやうに、さう神經過敏にいろいろな疑惑の穴の中に指を突込んで見なくとも好いではないか。またさういふ風に十分に物を所有したり統一したりしなくとも好いではないか。それよりもこのまゝの狀態で推し移つて行

く方が、その方がぐつと價値がありはしないか。そこに人生があるのではないか。たまさかに女の顏を見たり、時々甘い氣分を取交はしたり、また時にはスキートな涙を交換したりすることの方が、その方がかれに取つて必要なことではないか。こんな風に考へていつもそれを抑へるやうにして來たことをかれはくり返した。そしてさういふ風に考へるとかの女はかれの心の中にいつも素直に入つて來て、かれのつらい生活の唯一の慰め手となつて吳れるのであつた。

そしてさういふ時には、いつだつたか、もうかなり遠い昔で、その遊人の男があつたり執念深くつき纏つて來る男があつたりする頃だつたと思ふが、かれはこんなことを言つたことを思ひ出した。『やつぱりさうなのだね……。この僕といふ男があまりにうるさくないから、言はゞ戀人といふよりも、相談相手といふやうなところがあるから、それでかうして來られたのだね……。つまり繪か何かであらはして見れば、僕は傍の方からお前を見てゐる人なんだね……』勿論、今はさ

うした狀態ではない、震災以後かの女の心はぐつとかれに近寄つて來た。それは母親の言葉ではないが、年齡といふものがかの女を何よりも一番多くさういふ風にした。かれの戀心よりも、志摩子があるといふことよりも何よりも有効にかの女をさういふ風にした。かの女はそれだけ、かれが今だに疑惑の芽を持ち出すことを不愉快にした。それは忘れもしない二月の十五日だつた。かれとお銀とはこんな話をした。

『でもこゝまで來ようとは思はなかつたわね』

『本當だね』

かれ等は向うの土地にかの女が移つて行つて、それを始めてかれが訪問した日のことを今だに記念として、その日にばきつと何か食つたり何かすることにしてゐたのである。

三五

『あの時のことを考へると不思議な氣がしますね』

考へ深くお銀はつゞけた。島田は、

『あの時、お前は僕が行くと思つたかね？』

『いらつしやると思つたわ……』

『でも、まだ、あの時はあの人と喧嘩はしてゐなかつたんだね？』

『でも、一度引いたのをまた出るくらゐですからね。もう、あの人はたよりにならないぐらゐな氣がしてゐたにはゐたんですね……』

島田は十五六年前のその日のことを今だにはつきりと思ひ出すのだつた。電話がかゝつて來て、何うしても行かずにはゐられなかつたので、その時分つとめてゐた社を早目に退いて、その金を使つてはあとが困るのをちやんと知つて

居ながら、わくわくした心持で、その大川にかけた長い橋をわたつて行つた。それは西風の強く吹く日だつた。川の水は濃いお納戸色に流れて、土手の下には凄まじく高く波が寄せてゐた。先づ料理屋へ行かうとは思つたけれども、兎に角さういふ鞆屋といふ家があるか何うか、またそこに本當にかの女が出てゐるか何うか、それを知ることが出來れば知りたいと思つて、そしてその土手下の細い通りをその色街へと入つて行つた。それはさびしい巷路だつた。以前にかの女がゐた色街などとは比ぶべくもなかつた。ぽつりぽつり軒燈が出てゐて、何處かで靜かに三味線の音がしてゐる。こんなところに出なければならないやうになつたのかなどといくらか可哀相に思つたりして、一軒一軒覗くやうにして軒燈を見て行くと、二軒並んでゐる二階屋の奥に、兩方から押し潰されるやうになつてその鞆屋の軒燈が出てゐるのがふと眼に入つた。かれはじつとそこに立ち盡した。しかし入る氣には容易にはなれなかつた。二三歩向うへ歩いて行つてはまた引返して來

た。何でもその時その二階屋の藝者屋の入口から綺麗な若い妓が出て行つたが、それがいかにも怪訝さうに振返つてじろじろと此方を見て行つたことをかれは今だに覺えてゐる……。たうとう思ひ切つてかれは入つて行つた。幸ひにそこには何も知らない婆さんがゐただけだつた。家の人も誰もゐなかつた。二階からすぐかの女が下りて來た。それにしてはあの二階のガランとして何もなかつたことよ。それからもかれは度々その二階に出かけて行つたが、そこからは裏の池が見えて、時には雨がさびしく降つてゐたことなどもあつたことを記憶してゐる……。

『あそこにお前の派手な長襦袢がよくかけてあつたもんだ……。あれつきりなかつたんだね？』

『さうね……。たしか、また出ることになつて、母さんがやつと拵へて呉れたのね……』

お銀も遠い昔を考へるといふやうにして、『でも、あの時ひよいと下にあなたの

顔が見えた時はうれしかつた……、やつぱりさういふことがかういふ風になつて行く基だつたのね？』

『今考へりや、あの時分なんか、ちつとも好い藝者でも何でもなかつたのに何うしてあゝいふ風に引つ張つて行かれたのかな？　それが不思議だ……』

『今はさう思ふでせうね。あの時そら、川の縁の橋本に行つたぢやないの……。あの時のことを私もはつきりと覺えてゐるわ。そら、夕日がさして、椎の大きな樹が前にあつて、それにひどい風が吹いてゐたのねえ……。私、あそこで「わしが在所」を歌つたり彈いたりしたことを覺えてゐるわ。十疊か十五疊の大廣間の片隅か何かで……』

三六

『さうだつたね』

島田もその時のことを繰返さずにはゐられなかつた。

『あの時分はあそこも靜かで好うござんしたね』

『その癖、お前はまだ土地馴れないので、奥の大きなお茶屋によばれて行くことを得意にしてゐたもんだつたね。ひとつでも好いお座敷を餘計にしたいと言つてゐるやうな時だつたね』

『隨分昔ね』

お銀はかう言つたが、『でも、あの時分がこひしい……。何も苦勞なんかなかつたんですからねえ！　のんきなもんでしたからねえ！　人間ッていふものはいつの間にか、かうして經つて行つて了ふのねえ！』

『まア、そんなことは考へない方が好いよ。それよりは今日は折角の記念日だから、その時のことばかりを考へようぢやないか。その方が好いよ』

『さうね』

お銀が酌をしようとするので、島田は前にあつた盃をぐつと飲み干した。
『あの時、土手のすぐ下の竹本へ行つたね？　今でもあの家あるかね？』
『何うしましたかね。あのお上さんは、震災前まで仲見世の奥の方で小間物屋なんかやつてゐましたが、まだきつとあそこにゐるでせうよ。代が代つてからの肥つた上さんは何うしましたかね？』
『あの時分はあそこいらはまだ田舎だつたな……。静かで、あの家も藁葺か何かで、そら、入つて行くとあの如才ない上さんが出て來てチャホヤしたのを覺えてゐるよ。二階にはちやんと行火が出來てゐて友禪の赤い蒲團がかけてあつたね？覺えてゐるかね？』
『さうでしたかね』
『そら、外は薄月か何かで、梅が咲いてゐて、土手の向うでは、大きな聲で船頭が何か言つてゐるのが水に響いてきこえて來る……。丸で江戸時代の寮でもあり

さうな感じだねなどと言つたのをはつきりおぼえてゐるがね……』
『さうでしたかね？』
『心細いな……。さうすつかり忘れられて了つては……。皆はつきり覺えてゐるやうでなくちや……』
『さういへば、そら、あの時、お湯に入りましたね？』お銀はそれには答へずにわざと別なことを言つた。
『あの下のところの……』
『そら、お上さんがお加減は如何ですかなんて言つて……。私が入つて行くと、あなたつたら、何んだ、お前も入るのか？　なんて仰しやつて、きまりがわるさうにして、ぐんぐん上つて了つたぢやないの？』
『さう、さう……』
『やつぱりきまりがわるかつたのね？』

『さういふことは覺えてゐるんだね。(何うだらう、まア、私が入つて來たら、あんなに早く上つて行つちやつた) なんて思つたんだね。それで忘れられないんだね』

『さうかも知れないのね?』

其處に裏口の戸が明いたので母親が立つて行つた。さつきお銀が賴んで來た蒲燒が來たのであつた。かれ等はこの記念日はきまつて鰻を食ふことにしてゐた。

追憶も追憶だけではつまらないが、かうして追憶と共に現實があることは面白いことだ。かれは靜かなその一夜――土手下の靜かな一夜をそこにはつきりと思ひ浮べずにはゐられなかつた。『明日木下川にでも行つて見ようか。丁度梅見といふ氣候だね……』こんなことを言ひながら二人はそこで一夜を過した。外には薄月が微に庭樹の影やら藁葺の屋根やらを照してゐた。

三七

しかしこの記念日もさう穩かにばかりは過ぎなかつた。かの女がその遊人に一時夢中になつて、丁度この梅の咲く時分にその身を何處かに隱したことなどもあつた。その時は大騷ぎで、島田以上に母親がやつきとなつて、それからそれへと蔓を引張るやうにしてさがして、やつとさう遠くない田舍から無理やりに伴れて戻つて來た。それは島田に取つてつらいつらい一年だつた。それもかの女の心がすつかりそつちへ靡いて行つて了つてゐて、もはや何うにもならなくなつてゐるのなら、苦しいながらも思ひ切つてそこから引返して來るといふことも出來たであらうけれども、顏を見ると決してさうではなしに、何んなことがあつてもあなたとは離れない、その身が他の妻同樣になつてもあなたとは離れない。『だつてさうぢやありませんか、あなたとはさういふ形でこれまでやつて來たんですもの。今

更あなたと離れるやうな氣にはなれないわ、その時だつて、私、藝者さへやめなけりや好いんですもの……。表向はあの人と一緒になつたつて、藝者さへやめなければ、いつだッてあなたと逢へるんですもの……』と言つて、完全にその心の一部をかれに握らせてゐるので、それでかれは一層苦しい思ひをしなければならなかつたのであつた。ちよつと考へると、それは島田がだまされてゐるやうな形にも見えるし、そんな勝手を女にさせてまでそれにくつ着いてゐなくても好ささうなものだと他からも思はれ勝ちだつたので、一層かれは苦しかつたことを、今でもはつきり思ひ出すことが出來た。現に、その母親の思はくに對してさへ、かれは氣まりがわるいくらゐだつた。かれはその母親からすらも、『何うしてこの人はこんなに未練なのだらう、お銀はあんなに向うに夢中になつて、とても見込はなくなつてゐるのに、何うしてかういつまでもやつて來るのだらう』と思はれたことは一度や二度ではなかつたことをかれはよく知つてゐた。現に、母親の口か

ら、『もう私の力でさへ駄目なんですからね……』といふ最後通牒見たいなものすら受取つたのであつた。しかしお銀とかれとの間はさう母親の言つたやうなものばかりでもなかつた。そこにお銀がゐなければ爲方がないが、ゐさへすれば、顔を互ひに見せ合ひさへすれば、一度だつて決してかれを袖にはしなかつたのである。何んな時でも、かれの滿足するやうにしたのである。そこにかれ等の戀と言つたやうなものがあつた。否、それればかりではない、さうして一方にさういふ敵(あひて)手があるといふことが、何んなに島田の戀の火を煽つたか知れないのであつた。さうなると體で勝つより他爲方がない、思ひ切れないやうな熱い熱い烙印を體で押してやるより他爲方がないといふことになつて來た。そしてその烙印がいかにあつかつたか、いかに眞面目であつたか、またいかにパッショネイトであつたか。島田は今でもその熱い熱い溜息がかれ等をこゝまで伴れて來るために大いに役立つて來てゐることを繰返した。それは何でもその年のやつぱり此の記念日だ

つたと思ふ。かの女は今すぐに何處かに行かなければならない身であつたに拘らず、『さうね……今日は十五日ね、私どあなたの記念日ね……。いゝわ、かまはないわ』かう言つて二時間も三時間も腰をおちつけて、ぐいぐい盃を呷りながら二人して鰻を食つたことがあつたのを島田は今でも覺えてゐた。

『だつてあなたと私とのことは別よ。それは今やつてゐることとは別よ。あなたにだつてそれはよくわかるわね？』かなり醉つてはゐたけれども、お銀は立上りざまにかう言つて、大きく見張つた眼でじつと此方を見つめた。その眼！　地獄の底までも伴れて行かずには置かないやうなその眼！

三八

その他にもいろいろなことがあつた。その川ぞひの椎の樹のある料理屋も代が替はつたり抵當に取られて貸家札を張られたりしたが、今ではすつかり燒けてあ

とに小さなバラックが建てられてあるばかりだつた。人間といふものは、そこにゐる中は、いつも變らずにその同じ人が住んでゐるものだなどとむしろ退屈に思ふくらゐのものだけれども、いつの間にかその變らないと思つたものも移り變つて、家もなくなり、樹も伐り倒され、路のさまなども變つて、これがあの通りかとさへ思はれるやうになるのだから仕方がない。それから思ふとむしろ心の内に殘つてゐるものの方がはつきりしてゐる。島田はよくこんなことを思つて、自分の頭の中に深く疊み込んである光景をそこに一つ一つ展げて見るのだつた。しかもさういふ風にいろいろなことがあつたに拘らず、こゝまでかうしてやつて來たことをかれはまたしても繰返さずにはゐられなかつた。從つてかれのためには、その二月の記念日は長い道程を貫いてゐる一つ一つの宿驛のやうなものであつた。かれはそこにいろいろな宿驛と旅舍とを見る。心持の好い旅舍に泊つたこともあれば、終夜その旅舍に雨が漏つて、寢るにも寢られずに起きてゐたやうなこともあ

る。泊るべき旅舍がなくて草原のやうなところに露と共に寢たこともないではなかつた。また旅舍はあるにはあつても、客が一杯で泊れないので月の光をたよりに終夜てくてく歩いて行つたやうなこともあつた。かれに取つては、一面それがかれの人生であつたに相違なかつた。單に歡樂と言つて了ふことは出來ないやうな生活。またその一方には努力と艱難との生活。そこまで考へて來てかれはいつもぴたりとそれを押へた。

『何うしてかう人間といふものは雜り合へないものかね？』

『本當ね』お銀も自分に當てはめるやうにして言つた。

『いくらひとりでゐることをよさうと思つても、さう行かないんだからね。何うしても押詰めると一人ぼつちになつて了ふね』

『押しつめるからいけないのね……。私だつて、さういふことがよくあるわ。何ういふわけなんでせうね、お天氣のせゐとか、日のよしあしとかいふことかも知

れないけれども、理由なしに、さういふことがあるのね。その時は親だつて、兄弟だつて、あなただつて何うにもならなくなつて了ふんですものねえ！　眼の前が眞暗になつて了ふんですものね……。さういふことがよくあるのよ、わたしにも……。さういふ時は、爲方がないから、じつとして默つてゐますけどもね。もとは何でもないことに母さんによく喰つてかゝつたり何かしたもんですけどもね……。人間といふものは、誰でもさうかしら？』

『さうかもしれないな』

『だから、さういふ時にあなたが來て下さると好いのよ。さうすると、すつかり氣が變つて了ひますからね……』島田にはそれがそれとなくわからぬではなかつた。さういふ時には、女の心が海綿のやうに柔かで、あらゆるものがすべて深く纏はり着いて來るやうなのをかれは感じた。さういふ時には、『お前、また自分で自脈を取つてゐたね？』島田はよくこんなことを言つた。と、お銀はきまつて一

種いつもとは違つた笑ひ方をして（わかるでせう……私のヒステリカルになるわけが）と言つたやうな表情をするのだつた。そしてそれはかれをぴたりとその傍に引寄せずには置かなかつたあの力ある眼に續いてゐた。（私だつて、あなたのために、こんなに年を取つて了つた！）眉も眼も唇も額も皆な一齊にかれに向つてさう言つてゐるやうに見えた。

三九

さういふ社會を背後に持つてゐるといふこともひとつの原因であることを島田はをりをり繰返した。それは今はそこから出て來てゐる。傍に附いてゐる母親の口振などから押しても、かの女が堅くしてゐるらしいのはわかつてゐる。またかれ自身から言つてもそれを十分につかんでゐると思つてゐる。疑心暗鬼を起す餘地などは少しもない。しかしそれでゐて何處かに不安な心持がするのは此方がわ

るく嫉妬深いためであらうか。影もないところに影を見てゐるからだらうか。しかし今だにその不安を一掃して了ふことが出來ないのは――ともすればその家に入つて來ていきなりあたりを見廻すやうな氣分になるのは、やつぱりその背後にさうした昔の社會がくつついてゐるからではあるまいか。それはお銀は、此頃では、再び褄を取らうなどといふ考を持つてゐなかつた。さういふことは寧ろ其身の恥だといふ風に考へてゐた。さういふ話――再び褄を取ることなどは何とも思つてゐずに、むしろそれは當り前だといふ風に平氣で若い妓達に雜つて出て行く人たちの話を聞くと、單に氣の毒だといふよりは、むしろさげすむやうにして話すのを常としてゐた。それでゐながら、さういふ社會は何うすることも出來ずに常にかの女の背景を成してゐるのであつた。さうでなくてさへ昔の客がついて廻つてゐるのに、一度それが自由の身になれば、たちまちその中に引戻されて了ふのはわかりきつてゐるのであつた。否、現にさういふ昔の客がそこにもこゝにも

ゐて、もう長い年月を經たのであるからそんなことは思つてゐないだらうと思ふのに、決してさうではなしに、常に眼と心とを此方に向けてゐるのであつた。自由になつて來るのを待ち設けてゐるといふわけでもあるまいが、常に忘れずにこつちを見てゐるといふやうな形があるのであつた。さういふ社會では、妓達はさういふ客のことを戯談に家來々々などと言つてゐるが、つまりそれで、かうしてお銀のやうに遠く離れて來て了つてゐても、それでもその家來があちこちに散らばつてゐてこつちをじつと見てゐるのである。

そしてそれがかれと一緒に歩いた時などにひよつくりそこへ出て來たりするのである。また電車の向う側に乘つてゐて、『おや！』などと言つて聲をかけたりするのである。そしてさういふ時には、お銀はあとでいつでもそれを彌縫すると言つては語弊があるが、いろいろにして詳しく話してきかせるのである。あれは何處の旦那だとか何處の大店の番頭だとか、何處の活動の興行人だとか、『そら、あ

なた知つてゐるぢやありませんか。桃子さんの旦那で、いつか一緒に取卷に箱根に行つたことがあつたぢやありませんか。桃子さんたらだらしがなくて、酔つぱらつて困つたッて言つて話したことがあるぢやありませんか』などと言つて話すのであつた。それは島田は何とも思ひはしない。そんなことを何うかう思ふほど野暮ではない。しかしその身がその女を所有してゐるからと言つて、それでその得意さに滿足してなどはゐられなかつた。むしろさういふ人達がかの女の背後にゐて、かれが何うにも彼うにもならなくなつた時——それは、このまゝで徐かに押移つて行けばそんなことはあるまいけれども、何か運命のやうなものがやつて來て、何うしてもかの女を手離さなければならなくなつた時、それを受取るために續々として出て來ることを恐るゝのである。そしてそれはいつか一度はやつて來るかも知れないのであつた。かれは今でも、何うかすると、さういふ夢から覺めて、將來を暗示でもされたやうに、何とも言へない不安な心持で、夜の闇の中に

ぱつちり眼を明けてゐたりなどした。

四〇

何うせ人間は別れなければならないものにはきまつてゐる。何んなに愛したものでも、永久にそれと一緒にゐるわけには行かない。島田はさう思つては人間の何うしても墜落ちなければならない死の穽を頭に描いた。

戀と死――この二つのものは、若い時から常にかれを惱ました。要するに人間にはこの二つしかない。この二つのものを除いては、あとは問題とするに足りない。この心持はいつの場合にもかれを離れなかつた。いつでもかれはそのことばかりを考へた。空想の場合にも、また實行に近い場合にも……、しかも若い時には、この戀と死とが劃然と二つにわかれてゐた。戀は戀、死は死といふ風に考へられてゐた。それが中年になればなるほど、次第にその離れてゐたものが近寄つ

て來て、今ではその二つの問題がぴたりとひとつになつて、かれの前にあらはれた。島田は否でも應でもその身の老いて行つたことを痛感させられずにはゐなかつた。昔は戀と死とがひとつになるのは、多くは不自然な場合――心中とか、思ひのまゝにならないための死とか、不可思議な憧憬に誘はれたための死とかに限られてあつたが、今ではその二つのものが自然にぴたりと一つになつてかれの前にあらはれ出したのであつた。島田は自分が死んで、あとにその愛してゐたものを置いて行く場合などをよく此頃胸に浮べた。

それは誰だつて、皆な置いて行つたのだ。それは歴史の上にもさうしたことは澤山にある。歴史に記されないものの上にもなほ澤山にあるだらう。それが人間の運命だらう。それは、ある人に取つては、そんなことを考へるのは、情痴笑ふべきものであるかも知れない、言つたつてしやうがないことだと言ふかも知れない。それよりも若い時の戀のやうに、それからそれへと刹那的に移つて行つて、

新しい戀でも始めた方が好いといふかも知れない。島田にしてもその飽くまで燃焼的で刹那的であつた若い時分の戀と死とを考へぬでもなかつた。その時分はかれは自然に從ふといふことを敢てしなかつた。よく自然に反抗した。またよく自然に對して反逆を企てた。自然などに負けてはゐなかつた。負けるべく餘儀なくされた場合には、下唇を嚙んで意氣地のないその體をわざと虐待した。しかしいくら反抗しても何うしても自然には克てなかつた。かれは次第にその自然に從順であらねばならないやうになつて行つた。そしてその心持があやまたず、かれを今の老境へと伴れて來たのであつた。それが人生だ。かれはをりをりさう心の中に叫んだ。

今ではかれは眼の前に死を見た。若い時や中年に見たものとは比べものにならないやうな死を見た。十年前にあつては、死はまだ一つの空想であり、ひとつの幻影であり、またひとつの思想であつたけれども、今ではもはやさう間接なもの

ではあり得なくなつた。死と戀と。かれは何ぞといふと、そのことを頭に浮かべた。かれはいろいろな人達が、その愛した戀の珠玉を路傍に棄てゝ置いて行つたさまを想像した。またその愛したものがあらくれた兵卒どもの手に引きわたされて、よろよろとかよわく倒れかゝつたにも頓着なく、その首にそのやさしい色の白い首に荒縄が卷きつけられて、無造作に緊め殺されて行つたさまを想像した。そしてその殺されたのは何物にも變へ難い絶世の佳麗であつたことを想像した。またそれを愛した帝王がそのために痴呆(たはけ)のやうになつて間もなく死んで行つたさまを想像した。

四一

墓場までその戀愛を持つて行く人達のことなどがよく二人の間に繰返された。かれ等は自分の周圍にもさういふ人達を探して注意して見たし、新聞に出て來る

美しい人達の末路などにもよく眼を着けた。『やつぱりさうなるわよ。私だつてさうですとも……。志摩子なんか何うなるかわかりやしませんからね……。そら、昨日も新聞に新橋のお勝さんのことが出てゐましたわ！　あんなに全盛だつた人だつて、あゝいふ風になつて了ふんですからね。旦那が死んで了つたあとは、何うしたつて女はあゝなるんですかねえ！』昔は傍にも寄せつけなかつた旦那の子分見たいな人にその身を任せたのが情ないとお銀はいふのであつた。そしてかの女の考へでは、それといふのも、旦那がわるいからである。旦那の愛が十分でなかつたからである。生前かの女をおもちや以上に思つてゐなかつたからである。そこに行くと、旦那の死んだあとの女の操如何は旦那の女に對する考へ方如何といふことに歸する。旦那の愛さへ十分であつたならば、女は旦那がゐなくなつた後も決してさういふ風になるものでないと言ふのである。それはさうだらう。女の性質にもよるだらうが、實際に男の愛が深かつたならば、さういふ風にあたら

女を路傍に迷はせるやうなことはない筈である。しかし女の方はどうだらう？さういふ風に男が何不足なくして置いても、墓場までその男の戀を持つて行くか何うか。持つて行くやうに見せかけてゐても、實は持つて行かないのではないか、やつぱりそれは單なる男の希望にとゞまるのではないか。それは墓の前で涙を流すぐらゐのことはあるだらう。時々思ひ出して花ぐらゐは持つて行つて呉れるだらう。しかしそれだけで我々は滿足しなければならないのか。こんなことをかれ等は常に繰返した。

かれ等は男の方にも女の方にもさういふ形があると言つて、そこにいくつもの實例をあげて話した。Nの話――だしぬけにNが死んでお銀の同じ仲間の小銀があとに殘された話などもそこに持ち出された。『やつぱりあの小銀さんだつてNさんのことは忘れはしないでせう。しかしあとには金を殘して行つて呉れたのでなし、子供があるのぢやなし、生きて行かなければなりませんからね……』から

いふ時にはいつも金の話が出て來るのが常だつた。『やつぱりさうすると結局はそこだね！　世間で言つてゐる平凡な心理――金――女にだまされた男――さういふことになつてしまふのかな』別に笑ひもせずに眞面目な調子で島田は言つた。彼は平生、金は單に金だとは思つてはゐなかつた。金はすなはち心だ。男が女に對してその心をあらはす唯一のものだ。場合に由つては金でなければ男の心を女にあらはすことが出來ないやうなものである。島田は常にさう考へてゐる。決して金を卑しむやうな心の持方はしてゐない。しかし戀をそこまで持つて行くことは情けなかつた。さういふ風に言はずに――そこまで持つて行かずに、その一歩手前でその問題を解決して了ひたかつた。戀と倶に金をもその墓場まで持つて行きたくなかつた。『まア、爲方がないね……。さういふものなんだらうね。結局はそこに落ちて行くんだからね』かう言つてかれは默つて了つた。お銀も默つて了つた。

四二

金のことは今更此處に言はなくつても好いことだけども、それでもそれがかれ等の間に隨分大きな役割を演じてゐたことはたしかだつた。島田はよく世間の人達が、『皆なお金よ……。お金があるからあゝいふことが出來るのよ』とか、『あれであそこの家が治まつて行くのは、代りに、お金がその役目をしてゐるからですよ、それを考へると、お金といふものは不思議なものですね』とか言ふのを常に耳にして來た。かれは實はさう言ひたくなかつた。またさう思ひたくもなかつた。かれは若い時から金が萬能であるといふ考へ方を十分に否定して來た。しかし世の中に深く浸つて行くにつれて、事實は、かれをそこに留めては置かなかつた。あべこべに別な方へと行つた。やつぱり世間の大多數が金をさういふ風に考へてゐるのは止むを得ないことだと思はせるやうになつて行つた。

報酬に金を置くといふ考へ方はそれはいけない。それほど金は單純ではない。また金といふものはさういふ風に考へるべきではない。さういふ風に考へるといふことはたまたまその人の頭の單純さを、不聰明さを表白する材料にしかならないくらゐなものだが――それほど金は複雜したものだが、しかも、兎に角かれ等の間にあつても、その金といふもののはかりの分銅が、絶えず、彌次郎兵衛のやうに上に行つたり下に行つたりしてゐたことは何うすることも出來ない事實だつた。幸ひにしてそれが曲りなりにもその上下の平均を保つて來ることが出來たので、それでその間に、かれの髪は半白になり、かの女の顔はシミだらけになつたのであるが、そのかれの分銅をさういふ風に不平均にさせずにつとめてその狀態を長くつづけて來させたのは、それはやつぱりかの女の力で、かれひとりではそれを何うすることも出來ないのであつた。かれに對するかの女の心持がさうであつたればこそ、今日までそれを支持して來ることが出來たと言つて差支ないのだ

つた。かの女は時にその分銅を上下させつゝも、しかも、それを全く地上に落して粉碎させて了ふまでには至らせずに――さういふ危機はそれは二三度はあつたにしても、兎に角、さういふハメには陷らせずに此處まで續けてやつて來たのであつた。それはかの女としては、不滿も不平もあつたらう。こんなことをしてゐては一生うだつが上らないと思つたこともあるだらう。またその社會でのかの女の位置としては、それは決して十分でなかつたのは事實だつた。かの女はいかやうにも出世することの出來る人だつた。場合に由つては、それこそ香水の湯を沸かしてその中に身を浸けるぐらゐな榮華を掴むことも決してむづかしくなかつたかも知れなかつた。現にかの女よりももつと位置も容色もわるく藝も低い女ですら、巨萬の富を擁した金持の細君、またはおもひ物になつてゐるものが澤山にあるのだつた。しかしかの女はそれに對して、これつぱかしの不滿らしい表情をすら見せたことはなかつた。口へ出してその人の噂はしても、決してそれを自分に當て

はめはしなかつた。『だつて、それが果して仕合せだか何だかわかりやしませんもの……。人間のことは一歩中に入つて見なければ本當のことはわかりませんからね……』から言つて徐かに笑つて見せるのが常だつた。怜悧なかの女は、かれの力――何のくらゐその分銅を上下させるに足りる力を持つてゐるかといふことについてかなりに細かに知つてゐた。その反射作用として、かれはかれで出來るだけかの女に不自由にさせないやうにつとめた。それはとても贅澤はさせられなかつたにしても……。

四三

金のことを持ち出す時には、お銀はいつもわざとそれを誇大して言つた。でなければそれを裏から言つた。しかし本當の心持を島田はその中から探すことをあやまらなかつた。島田にしては出來るだけのことはしてやりたいと常に思つてゐ

た。

『金のきれ目は縁のきれ目といふことがあるが、何うしても結局はさうなるわけかね』

時には笑ひながら島田はこんなことを言つた。と、お銀は顔をあげて、

『しかしお金だけでは、こんなにして來られはしないわ』

『それはさうだな』

時にはお銀は一歩を進めて言つた。

『でも、かういふことはあるわね。私はそれを信用してはゐるけれども、大丈夫だとは思つてゐるけれども、女といふものは縋つて行く方ですからね。たまには不安はあるにはありますね。あなたのお腹はわかつてゐると言つても、底の底はわかりませんからね。一體、あなたがさういふ人ですもの……。奥さんにだつて誰にだつて財布尻は見せたことはない人なんですもの。だから何うかすると不安

になるわね……』

『そんなことはありやしないよ。その時にはお前がすぐこまらないやうに、豫めちやんとそれを言つておくよ』

『それはダメね。今ではさう言へるけれども、いざとなれば、そんなこと豫告なんか出來るものですか、あなたは豫告出來る人ぢやないわ』

『さうさな、それはさうかも知れないな！』島田の頭には、路を歩いてゐながら、をりをりさうした光景を眼の前に描いて見たりすることなどがありありと映つて見えた。たしかにそれに相違なかつた。せつぱつまつたその刹那までかれはその心の底を誰にも知らさないに相違なかつた。

『しかし、大丈夫だよ』

『それは大丈夫なのはわかつてゐるわ。あなたといふ人は、もしさういふ時には、最後の最後まで默つて戰つてそしていけなくなればなる人と……。だから、

私、本當にすまないと思ふことがありますよ……』

『つまり底まで見せて貰へないのが不滿だといふわけなんだね？』

島田はその内兜をすつかり見透かされたやうな氣がしたから、わざと輕くこんなことを言つた。

『それはさうぢやないわ。人間はしつかりしてゐればゐるほど、さうなんですものの。さういふ人が女には一番力になるのよ。だから私は不滿があつてさう言ふわけぢやないんですの……』お銀は考へるやうにして、『人間つてしやうがないものね！』

『もう、そんなことを考へるのはよす方が好いね……』

暫く默つたあとで島田は言つた。

『さうね……。親船に乘つた氣でゐるわ……』

『その方が好いよ。お前のやうなことを言つて來ると、人間は一寸先きはヤミだ

からね。今、かうして向ひ合つてゐたつて、明日は何うなるかわかりやしないからね』

『でも、私さういふことをよく考へるわ……昨夜も夜中に目がさめて、一時間も二時間も考へてゐたわ。今朝起きて、私、餘程何うかしてゐると思つた。一體、此頃、何うしてさういふことばかり氣になるのでせうね？』島田の顔をじつと見て、『本當に自動車や電車に氣を附けて下さらなくつちやダメですよ。あの通はそれはあぶないんだから……』

四四

島田は次第にお銀のことを誰にも話さないやうになつた。それをかれの親しい友達の一人が不思議にして、『何うしたね？　此頃向うの人は？』などと訊いても、『うむ……』などと煮え切らない返事をして、成るたけあとを言はないやうに

した。

友達はしかしそれで滿足してゐなかつた。

『震災後、もう向うに歸つたのかね？』

『……』

島田は何か言はうとしたが、しかも言葉は口から出て來なかつた。

『本當に何うしたね？』

かれは爲方なしに、

『よくは知らんけどもね。……また何處かそこらにゐるんだらう？　向うには歸れないんだらう？』

『さうかね……』

『あゝいふ人ははつきりとわからんよ……』

『さうかな……』友達は考へるやうにして、『やつぱり大打擊だつたらうからな』

『うむ……』

と言つたきりで島田はあとを續けなかつた。

田舍の方にゐるひとりの友達は今でこそ一緒に酒を飲んだりすることは稀になつたが、昔はお銀などとよく知つてゐて、いつも二人で出かけて行つたりしたこともあるし、お銀とその遊人のいきさつもかなり詳しく知つてゐるので、好い加減な島田の返事では納得しなかつた。

『それで何うしたんだえ？』

『別になんでもないよ。……』

『だつて……』

（おかしいぢやないか）その田舍の友達は、島田の軀の内までさがすといふやうにじつとその眼を見据ゑた。

『そこらにゐるにはゐるんだらう？』

『それはさうだらうけれど……ゐるにはきまつてゐるだらうけれども……何うしたつて言ふのサ？』

『あゝいふ人達はいろいろな人がゐるからね……』

『ぢや、もう君はあまりかの女に携はつてはゐないといふわけかね……』

『まァ、さう急追せずに置くもんだよ、君……さういふことは？』

爲方なしに島田はかう大きく上段から言つて笑つて見せた。

『それはさうだけどもさ……あまり深入り過ぎたかな』

『うむ』

その田舍の友達も笑つて、『まァそれぢや、今まで通りと思つてゐて好いわけだね……それはさうだらうな……。さうてきぱき何うにもならないだらうからな』

一時はわざと此方から盛んに吹聽したものだつた。かくして置くべきものをわざわざ他に見せつけて、それを見得にしたといふでもないが、さういふ關係を表

面から肯定させる爲に、わざと自分で金を使つてお茶屋からお茶屋へと泳いで歩いたり、さう親しくもない友達まで、かの女を見せたいがために御馳走をしたりして、かへつてそれがために反感を持たれたりしたものだつた。何もそんなことを隠して置く必要などちつともありやしないぢやないか。人間が誰でもやつてゐることぢやないか。かういふ風に、大ぴらにあちこち伴れて歩いたりしたものだつた。つまりまだ十分自分のものになつてゐないけど、それを世間に肯定させる必要があつたのだ。それがいつとなしに次第にその反對の形を取つて行つた。かれはつとめてそれを内輪にした。敢へて隠すといふほどでもなかつたけれども、それをわざわざ他に言ふ必要はないといふやうになつた。二人は二人だけで好かつた。それだけかれ等は益々かれ等の心の巣の中にのみ住むやうになつて行つたのであつた。

四五

此方でさういふ風に内所にすると、友達の方でも別にそれを深く穿鑿するといふ形はなくなつて、かれ等の狀態は、たとへて見れば重みを持つた、あるひらつたいものが次第に水の中に沈みでもして行くやうに、段々祕密の中に墜ちて行くのを感じた。世間とか、第三者とかいふものは、時には鋭敏に、おせつかいに且神經質に見えることもあるものだが、また時には全く無關心に、のんきに、何んなことをしても一向頓着しないといふやうに見えることもあるものだ。したいことを勝手にする方が好い。何うせ人間のやることである。めづらしくもない。後にはかう言つて振返つても見なくなるのが常であつた。島田たちもさういふ心持を次第に感じ出した。自分等の戀もいつとなく水の底に次第に沈澱して行くやうなのを感じた。

その沈澱のさびしさ、或はまたひとり手に祕密にされて行くさびしさ、それは島田たちの今まで經驗しないものだつた。烈しいやきもちでも燒かれゝば、それに對してその戀を飽くまでも支持しなければならないといふ反射作用も燃え立つて來るだらうし、世間に問題にされたり、第三者からやかましく言はれたりすれば、益々反抗的にそれほどのものでもないものでもやけに結びついたり何かするものであらうが、さういふ形は、島田がじつと口を噤んでから、全くそのあたりにその面影をさへ留めなくなつた。かれ等はきまつた日にきまつたことをして、同じことを言つて、そしてわかれて行くのだつた。向うにゐた時には、それでもまだ影のないところに影を見たり、お互ひに些細なところに暗中摸索をしたりして、時々さゞ波が寄せて來るやうなこともないではなかつたが、むしろそれは淡いながらも一種の色彩をかれの戀の上に加へてゐたが、今ではさういふものも甚だ少く薄くなつて行つて了つた。ある日、その話を持ち出すと、『さうね。たしかにさ

ういふ氣がしますね……。私にしては、たゞあなたの來るのを持つてゐるだけになつて了つたんですからね……。待つといふこともつらいことね……』かう言つてお銀はそれをその身の方へと持つて行つた。

時にはお銀は言つた。

『此頃は何う思つていらつしやるんでせうね?』

『まア、好いぢやないか。そんなこと』

『もう私との關係なんかないものと思つていらつしやるのかしら?』

『さア――』

『何ともおつしやらない?』

『此方から言はんからね……』

『いくらおつしやらなくつても、考へてはいらつしやるでせうね』

『さア――』

『だまつてゐるのは、怜悧なのね……』
『まァ、しかし、さういふことは、そつとして置く方が好いよ』
『さうね……』お銀はかう言つたが、考へて、『Sさんだの、Mさんだのは何うして？　ちつともいらつしやらない？』
『そんなことはないよ……。いつでも逢つてゐるよ』
『私のこと、もう何とも仰しやいませんか？』
『此方からも言はんからね』
深く沈澱して行くかれ等の戀のさびしさをお銀が痛感してゐるのはこれでわかつた。かの女にしても、いつの間にかさういふ位置にその身が置かれたといふことについて、別に不足はないにしても、何となく一種の不思議さを感ぜずにはゐられないのだつた。

四六

『まァ、好いぢやないか。なるたけそつとして置く方が好いぢやないか』
その言葉はこれまでにも度々島田の口から出た。要するに、二人のことは二人だけで好いので、生中、世間に觸れたりなどすると、折角の靜かなその空氣は破れて、また以前の煩悶だの苦痛だのに落ちて行かなければならないのであつた。それは周圍のことを考へたり、世間のことを考へたり、また不可思議な心を問題にしたりしては、とてもかうしてじつとして落附いてはゐられないやうなことがありあまるほど出て來るであらうけれども、しかも、かれ等はさういふことは一時全くほつたらかして置くことにしてゐるのである。姑息と言はれても爲方がない。妥協と言はれても止むを得ない。またある群からは、かれも昔の眞純さを失つて、わるく事を糊塗するやうな態度になつた。と言はれるかも知れないが、こ

れも何うも致し方がない。兎に角さういふ煩悶も、反省もまたわざと悲しい心の表情をして見せるといふことも、必要には必要であらうけれども、それよりももつと二人がそつとして置かれるといふことが、いつでも逢はうと思ふ時には逢へるやうになつてゐるといふことが、世間には何んなことがあらうが、雨が降らうが、風が吹かうが、また第三者には何んな事件や悲劇が起らうが、そんなことには何の痛痒も影響も感ぜずにそつと二人が何處かで逢へるやうになつてゐるといふことが、あらゆること以上にかれ等には必要であつたのであつた。かれ等は二十年も前から常にさうして逢つて來たことをくり返した。そしてさういふ時にはいつでも西鶴の『一代女』の中にある『顔を見た上はたゞでは歸れもしないし、また歸しもしない』と言つた言葉を思ひ出されるのであつた。かれはまたしても、かの女に遊び人の情人(いくひと)があつた時のことを思ひ出した。その時でもやつぱりさうだつたことを思ひ出した。(まア何だつて好い。逢ひさへすれば好い)今でも

かれはさう思つて、その電車の停留場の階段を下りて行くのだつた。

さう言つて了つてはあまりに情痴すぎるかも知れないが、かれの經て來た五十年の生活の中では、それより以外には大したものがあつたとは思へないのであつた。金を稼ぐこと、自分の名を世間にひろげること、別な反對な勢力と相爭ふこと、生活狀態を一歩々々好くして行くこと、さういふこともこの世に生きて行く上に於ては、かなりに無關心ではゐられないことには相違なかつたが、それも一方にかの女があるからで、もしかの女がかれの生活の途上にあらはれて來てゐなかつたなら、その生活力も、決してさう強くは働かなかつたに相違ないのであつた。それは人に由つては、それをかれのために惜しむといふものもあるかも知れない。何うしてさういつまで同じところに低徊してゐるのかといふものもあるかも知れない。もう好い加減にしたら好いぢやないか、お前の書いたものゝ中にはその女しか出て來ないぢやないか。その女がいろ〳〵に形を變へたり姿を變へた

り、時には酌婦になつたり藝者になつたり普通の女になつたりしてゐるだけではないか。戀の題目だつてやつぱりさうぢやないか。その範圍を出でないではないか。もつと違つた戀をしたら何うか。あまり單調すぎるではないか。かういふものもあるかも知れない。否、それはたしかにそれに相違ないのだが、しかしそれがかれ等の戀の反射作用なのだから何うも致し方がないのであつた。

かれですら、何うしてかう飽きずに續いて來たか、逢ふ度毎にいつも新草(にいくさ)の若々しさを失はないかに驚いてゐるのであるから。

四七

かれの書齋の一間はかれに取つてたしかにひとつの仕事場であつた。とても綺麗に片附いてなどはゐなかつた。外國の小說が一方にころがつてゐるかと思ふと、此方の方には一杯に雜誌や小冊子が散らばつてゐた。紙屑で詰められた籠。

手紙などの混雜(こちやく)に入つてゐる竹細工の箱。机と言つても漆がはげてところどころ木地が見えてゐたり、鉛筆を削つたあとの屑が小刀(ナイフ)と一緒にそのまゝそこにためられてあつたりした。かれはそこで終日筆を執つたり、左の手を頰に當て長い間考へてゐたり、勞れるとそのまゝごろりとそこに體を横に倒したりした。そしてその南の窓には、樹の影が日ざしの加減でその影畫(シルエット)を映したり消したりした。鳥の聲などがチ、チと聞えた。

かれはそこで世間と對した。否、更に言ひ換へれば、かれはそこでその机に向つて長い間文壇と相面して戰つて來たと言ふことが出來た。コツコツと小さな響きを立てゝ絶えず動いてゐるかれの鉛筆は、たしかにひとつの武器として役立つた。それにしてもいかにかれが戰ひらしい戰ひを世間と戰つたであらうか。又いかに苦しい、作戰の十分でない戰ひを戰つたであらうか。徒勞であるといふことをもちやんと心得てゐながらも、いかにその最後の戰ひを戰はうとしたであらう

か。いかなる場合にもかれは決して臆病ではなかつた。また決してかれは卑怯な妥協を敢へてしなかつた。その行からうとするところへは飽くまでも行かうとした。かれは全く疲れ果てゝ數日そこに倒れて寢てゐたことを思ひ出すことが出來た。またその反對に世間に向つて快よい一撃を與へて微笑を含んでそこに坐つてゐたことを思ひ出すことが出來た。從つてかれのこの書齋の一間は仕事場であると同時に策戰室であると言つてよかつた。それはかれの家庭には世間は竟に入つて來なかつたけれども、この一間には誰も彼も、かれに向つて泥を擲つものも、また假面をかぶつて近寄つて來て忽ちその假面をかなぐり捨てゝ了ふものも、泥足のまゝのものも、靴を穿いたまゝのものも、すべてそこに入つて來ようとしたことをくり返すことが出來た。それは他から見たら何でもない殺風景な一室であるに相違ないが――『何んだあまりにガサガサしてゐるぢやないか、もう少し粧飾したら好いぢやないか、額でもかけたら好いぢやないか』と呆れられるに相違ない

が、しかも島田に取つては、そこにかれのこれまで經て來た世間が深く深く沈んで澱んで行つてゐるのであつた。かれはそこでは全くひとりだつた。つらいつらい生活ではあつたけれども、それでもかれはそこに入つて行かないわけに行かなかつた。かれはいつかこんなことを友達に言つた。

『この話は、そら、あの海岸の病院で死んだKがいつも口癖のやうに言つた話だが、Yといふ大家は、自分の筆を執つてゐる傍に始終美しい女を引きつけておかなければとても筆が執れなかつたさうだ。それほど筆を取るといふことはつらい、張り詰めたことなのだ。實際世間の人は我々が書いたものなどを何とも思つてゐないけれども筆を執るといふことは、それほどつらい勞働なんだ……。勞働の中では一番全力的な張りつめた勞働なんだ……。さうKが言つたが、實際さういふ氣がするよ。疲れ切つた時に、傍にさういふ明眸皓齒がゐたら、それこそ何んなに好いだらうと思ふよ――』

四八

疲れた時などには島田はことによくその言葉を思ひ出した。また世間に對して強く働いてゐる人達の周圍にはいつもさうした色彩が取卷いてゐることを思ひ出した。それはさういふ刺戟でもなくては、とてもまぎらして行くことは出來ない勞苦であるのであつた。

從つてかれのその一室は、外見は靜かで、樹木や花卉や鳥の聲などで、滿たされてゐたけれども、內部は決してさうしたのんきなものではなかつた。冷と熱と。混亂と統一と。細かい心の悶えとあえぎと。その間を綴つて掠めて來る、明るい眸と苦しい暗い體と。さう言つてはそれはあまりに誇大に過ぎるかも知れないけれども、昔の英雄達の情事——たとへば項羽とか秀吉とかナポレオンとかの情事の心の光榮もそのまゝそこにあるやうな氣がした。從つてかれはさういふ人

達に一種言ふに言はれない理解と親しみとを感じた。またそれと同時に、たとへ何のやうに苦しくとも、また何のやうに悶え喘いでも、兎に角、生效(いきがひ)のある生活を送つて來たことを考へた。何うかすると、この書齋の一室の話がかれとお銀との間に出て來た。

お銀は十年ほど前にたつた一度そこに入つて見たことがあつた。

『今でも、あゝして籐椅子にメリンスの蒲團をかけて、くたびれると、あそこに横になるんですか?』

『まア、さうだね……』

『もつと好いベッドか何かを買つたら好いぢやありませんか?』

『いつもさう思ふけれども……それほどにしなくつても好いんだよ。それに、ベッドを買ふのは何だかいやな氣がする……』

『何うして?』